
ふたつの指輪

柊深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたつの指輪

【Nコード】

N0838BA

【作者名】

柊深

【あらすじ】

両手に余る程の喜びや幸せに囲まれていながら、たった一つの哀しみのために命を捨ててしまう人がいる。
沢山の苦しみを抱えながらも、小さな灯火を一生懸命守りながら生きようとする人もいる。

中学・高校とずっと付き合ってきた恋人を故郷に残して東京の大学へと進んだ理恵だったが、故郷に残って漁師となった恋人は、いつか理恵を迎えに行くという約束を残したまま、冬の漁から帰って来

なくなってしまう。

ただ一人約束を信じ、待ち続ける理恵のもとに届いた知らせは・・・

。 本小説は、小学館集英社プロダクション運営のサイトでも掲載中
です。

http://www.dreamtribe.jp/novel/works.aspx?work_id=446

序章

想い出

伯母さんが亡くなって五ヶ月が過ぎた。

私は伯父さんと一緒に遺品の整理を始めた。

伯母さんが亡くなってから暫く伯父さんは放心状態だったけど、姪の私が元気をあげなきゃと、遺品の整理を手伝うことにした。

私の家と伯父さん夫婦の家はスーパの冷めない距離にある。

子供のいなかった伯父さん夫婦は、私が小さい頃からとても可愛がってくれた。

特に伯母さんは自分の娘のように接してくれたし、私が学校に上がると、お母さんが仕事の関係で学校の行事に参加できなかったとき

は代わりに来てくれたこともあった。

だからお母さんに叱られたときなんかは、よくこの家に逃げ込んだものだった。

お母さんは、伯父さん夫婦の思い出でもあるから邪魔をするなと言
う。

でも、私が伯父さんの家に顔をだすと、伯父さんの方から声をかけ
てくれたんだ。

私だって、お母さんの言ってること、少くくらは分かっている…
…つもり。

「いいの？」

「真奈美に手伝って欲しいんだよ」

伯父さんはそう言って、おいでおいでと手招きしながら微笑んだ。

「お邪魔しまーす」

伯父さんも、伯母さんも医者だったので、二人の部屋には難しそ
うな医学書が沢山並んでいる。

お母さんが若い頃は、二人は世界中を飛び廻っていたとお母さんか
ら聞いていた。

私が生まれてからはずっと日本にいるけれど。

「真奈美は、机を整理しておくね。私は本の整理からはじめるよ」
私は伯父さんに言われたとおり、伯母さんが使っていた机の整理から始めた。

そしてそのとき、見つけたんだ。

机の一番下の引き出し。

その奥深く大切に丁寧に包まれた、とっても古い大学ノートと手紙の束。

何気なくノートを開いて中を見た。

え？

仕事のノートじゃなかった。

これって……

伯母さんの……

でも、

相手の人、伯父さんの名前と違う……
手紙の差出人も……

私は伯父さんの方をチラッと見た。

伯父さんは難しそうな本を一冊ずつ開きながら選り分けている。

「おじさん……」

「うん？」

「これ……」

私がバツが悪そうにする必要はないんだけど、なんとなく……。

「ああ、それ……」

伯父さんはそのノートの内容は知っているようで、特に驚きはしなかった。

「どれどれ……」

伯父さんは本棚から離れて、私が見つけたノートを手を取った。

そして暫くページをめくっていたけれど、

「天に昇るとき、一緒に燃やすべきだったかな……」

と、独り言のように呟いた。

「ごめんね。中、ちょっと見ちゃった」

「見なきゃ、整理できないからね」

伯父さんは、特に気にする様子でもなかった。

そしてまた、本棚の整理を始めた。

私も再び小物の整理を始めたのだけれど……

私の意識はさつき見つけた伯母さんのノートに集中したままだった。

暫くして私は整理している手を止めて、伯父さんに尋ねた。

「おじさん？」

「何だい？」

「さつきの、おばさんのノートのことだけれど……」

伯父さんは、整理していた手を止めて不思議そうに私の顔を窺った。

「真奈美は、そのノートが気になるかい？」

「さつきお母さんから、おじさんたちの思い出の邪魔をするなって言われたんだけど……」

「真奈美が聞きたいなら何でも答えてあげるよ」

「聞いてもいいの？」

「真奈美はいくつになった？」

「え？　じゅ、13歳」

「そうか、もうそんなになったか……理恵がそのノートを書き始めた齡に……」

“理恵”は伯母さんの名前だ。

「おじさんじゃ……ないよね、相手の人」

「ああ」

「おばさん、亡くなるまで大切にしてた。おじさん平気なの？」

「真奈美はストレートだね。そんなに気になるかい？」

「だって、おじさんとは別の人との想い出だよ。おじさんと結婚してからもずっと大切に持ってたんだよ。私だったらきつと耐えられない。おじさんはどうしておばさんと結婚したの？」

伯父さんは簡単に答えた。

「好きになったからだよ」

「……」

確かにその通りなのかもしれない。

でも、
なんか…、納得いかない。

伯母さんの心の中には別の人がいるのに。

ノートのことも知っているのに。

納得のいかない顔をしている私に伯父さんは付け加えた。

「真奈美は好きな人、いるのか？」

突然話が私の方にふられた。

「え？ えっ、いや、その、なんていうか…」

自慢じゃないけど、私はすぐ顔に出る方だ。

「いるんだね、好きな人」

「か、片想いだけど…」

「気持ちはもう、伝えたかい？」

「そ、そんなことできるわけ…」

「じゃあどうして、片想いだって分かるんだい？」

「だって…、彼女いるもん…、たぶん」

「それでいいの？」

「仕方ないもん……」

「理恵の心の中には、いつも初恋の人がいたよ。でも私は結婚した。彼女もそんな私に最期まで尽くしてくれたよ」

「な、なにそれ、意味わかんない、どういうこと？」

「真奈美」

「なあに？」

「理恵の心の中に初恋の人がいるからって、何もしなかったら何も始まらなかったんだよ」

「それはそうだけど……」

「大切なことは、伝えることだよ」

「今は……いいの……、想ってるだけで……」

「真奈美の思うようにすればいいよ。でも、私ならきつと伝えるよ。想いが届かなくても、たとえそれが辛い結果になっても、時が思い出に変えてくれる。」

でも、伝えなかったという後悔は、いつまでもいつまでも残ってしまふものだよ」

思い出に変わるものと、後悔として残るもの？

今の私には正直いってよくわからない。

ただ、今までとても大好きだった伯母さんに、ちょっとだけ不信感を抱き始めている自分がいた。

伯父さんがかわいそうだよ…。

「貸してあげるから読んでみなさい」

「え？」

伯父さんに見透かされたのかな？

今、抱いている伯母さんへの不信感。

「理恵の気持ち、読んでみなさい」

「い、いいの？」

ちよつと…罪悪感。

でも、伯父さんは優しい眼差しで頷いた。

私は、伯父さんからノートを受け取った。

「お母さんには内緒だよ」

私が部屋を出るとき、伯父さんはそう言って笑った。

伯父さんと結婚してからも、亡くなるまで初恋の人を大切にしていたなんて…。

伯母さんが亡くなった時、いつまでもいつまでも泣きやまない私を伯父さんが気遣ってくれた。

本当は伯父さんの方が一番辛かったはずなのに。

大好きだった伯母さん。

でも、ごめんね。

私いま、伯母さんにちょっとだけ腹を立てている…。

夜、自分の部屋に戻ると私は早速ノートを開いてみた。

ノートは、伯母さんが初恋の相手に初めて自分の気持ちを伝えるところから始まっていた。

相手の人も、ずっと前から伯母さんのことが好きだったみたい。

ちょっとドキドキした。

でも、そのあとは、ただのつまらない交換日記だった。

学校での出来事や普段の生活のことが延々と続くだけで、期待していたような色っぽいやり取りはまったく出てきそうにない。

今じゃ、メールで普通にやり取りしているようなことばかり。

ノートは高校卒業と同時に終わっていた。

なんで？　なんで伯母さんはこのノート、ここまで大切に持っていたの？

なんとなく、残りの余白のページをパラパラとめくっているときだった。

ページをめくる手が止まった。

ページいっぱい書かれた一言。

“あの人を返して”

殴り書きのようなその文字は、明らかに、ずっとあとで書き足されたものだった。

“返して”って、どういうこと？

あの人って、たぶんノートの相手。

なに？　なにがあったの？

おじさんは、このページのこと知っているんだろうか？

お婆さんの心の奥にずっと残っていたこの人はどうなったんだろう…

一緒に渡された手紙の束、
中を見るのがちょっと怖くなった。

薄っぺらい封筒は“あの人”からのもの。

少し厚めの封筒は、お婆さんが出さなかったままの手紙。

一つだけとても分厚い封筒があった。

誰かに宛てて書いたものではなさそうだった。

私はこの分厚い封筒に収められていた手紙から読み始めた。

ここには、まるで伯母さんが心の整理をするかのように、“あの人”へのすべてが記されていた。

そう、

ここには伯母さんの初恋が、

初恋のすべてが、

綴られていた…。

第一章

絆

両手に余る程の喜びや

幸せに囲まれていながら、

たった一つの哀しみのために

命を捨ててしまう人がいる。

沢山の苦しみを抱えながらも、

小さな灯火を一生懸命守りながら

生きようとする人もいる。

私はどっち…？

少なくともあの頃の私は、前者の方。

何も考えたくなかった。

私のすべてを無に帰したかった。

あの日、あなたが
私の前からいなくなってしまうました。

たったそれだけのことなのです。

たったそれだけで、

私は私のすべてを終わらせようとした。

私の心の中にはいつもあなたがいて、

あなたがいたから私は遠くで離れて暮らしていても、一人で頑張つてこれた。

あなたという世界がいつのまにか私の存在を確かめる唯一の場所になっ
ていたのですね。

あなたという海の上に浮かぶ小さな舟があ頃の私。

小さな舟にとつてなくなる筈のない大きな海が突然なくなってしまう
のですから、

舟はどこへ行けばいいのか分からなくなってしまいました。

あれからもう十二年も……

過ぎたのですね。

今、私の中にあの頃とは別の新しい何かが育ってきていることだけ

は確かです。

今まであなただけを愛し続けて生きてきたこと、やがては風化して
いってしまうのでしょうか？

このままじゃ、私の今までのすべてが嘘になってしまいそうで、も
う一度確かめにきました。

*

憶えていますか？

中学校の体育館の裏から続く細い路を辿っていくとお寺がありまし
た。

そのお寺の横の長い長い坂道を上り詰めたところに小さな公園があ
り、

この場所には小学生の頃よく友達と遊びに来ました。

地元の人たちも殆んど上ってこないの、友達と悪い相談をする
きはいつもここでした。

ここから見下ろすことが出来る小さな海の町、

そう、ここはあなたと私の故郷。

私があなただけのことを始めて意識したのは小学六年生の秋。

人口も少なく、
小さな町なので学校はひとつしかなくて、

たとえ同じクラスにならなくてもみんな小さい頃からの知り合いみたいなものでした。

私たちも幼稚園から中学を卒業するまではずっと同じ学校で過ごしました。

何度か同じクラスになったこともありましたが、私はあなたのことをあの日までは特に意識することはありませんでした。

小学生の頃は男子と女子が一緒になって、よく校庭で日が沈むまで飽きもせず毎日のようにドッジボールをしました。

運動が出来る子出来ない子に拘わらずみんなで一緒になって遊びました。

あなたは運動が出来る方でしたが、私はどちらかといえば駄目な方。それを知ってか知らずか、あなたは他の人たちに対しては強いボールを投げるのに、

私に対してはいつも緩いボールにしてくれましたね。

私はそのことにはまったく気付いていませんでした。

あの日、一人の男子があなたに向かってこう叫ぶまでは。

「おまえ、理恵のこと好きなんだろう！」

その声に、一瞬にして固まってしまった私。

校庭に転がったままのボールと、

一斉にあなたへと向けられたクラスの視線。

「そつだ、そつだ」

「理恵のときだけボールが緩いぞ」

「ひどーい」

「私たちには強いボールぶつけておいて」

「どうなの、好きなの？」

「白状しろー!」

男女混合の健やかな校庭の風景が一瞬にして、コートの中はあなたへのつるし上げの場が変わってしまいました。

ただ、陰湿な雰囲気はまったくなくて、そこが昔の田舎の良いところだったのでしよう。

ちょうど異性を意識し始める年頃でもあったし、そういう話題には皆が敏感に反応しても不思議ではありません。

結局皆に詰め寄られ、あなたの口から出た答は私をもっと驚かせるものでした。

「好きだ！ だったら何だよ！」

それは私に向かつてではなく、詰め寄ってきたクラスの皆へ投げ返された言葉。

売り言葉に買い言葉のようにも思えるあなたの言動でしたが、

私の心臓はまるで別の生き物のようにバクバク音をたてて既にパンク寸前の状態になっていました。

今度は一斉に私の方へ集中する視線。

心臓以外は時間が止まってしまった私。

あなたは全然違う方を向いたまま。

「理恵はどうなの？」

「好きなんだって」

「つきあってあげれば？」

みんな口々に勝手なことを言い始める。

そんなこと突然言われても困る、

それが正直な気持ち。

今まで異性として意識したこともなかったし、いきなり本人ではな

く周囲に対して宣言されたってどう答えていいのかわからない。

私は…

無意識に小さく首を横に振ってしまいました。

ああ…

皆のがっかりするよつな声とどよめき。

違う

ごめんなさいとか、
興味ないとか、

そついう意味じゃない

ただあまりにも突然でびっくりしたただけだから……

心の中ではそう訴えながら、言葉になって出てこない。

人形のように突っ立っているだけの私。

再びあなたに集中する視線。

でもあなたは

「もう一回やるついで」と、

その場をリセットするかのようにボールを拾いなおしましたね。

仕切りなおして再び始まるドッジボール。

まるで何事も無かったかのように投げては投げ返されるボール。

ボールが誰かに当たる度に発せられる歓喜や悲鳴。

私だけがまるで魂が抜けたようにゆらゆらとコートの中を彷徨っている…

結局この後どんなふうに解散したのか、どんなふうに帰宅したのかまったく憶えていません。

次の日、

教室の黒板に相合傘でも書かれているかもしれないと、登校するのがちょっと不安だったけれど、

そのようなこともなく

いつもどおりの一日が始まりました。

あなたやクラスの皆も何の変わりもなく、いつもと変わらぬ毎日が始まったのです。

ただ私一人を除いて…。

あなたもクラスの皆もきつとあなたが私にふられたと
思っているの
でしょう。

いいえ、

実際あなたがあの日クラスの皆に宣言したことも、
そのときは本心
だったのかどうかさえわかりません。

皆に詰め寄られて、わたしを気遣って嘘を言っ
ただけのことだった
のかもしれない。

でも…、

私のあなたへの恋はあの日から始まったのです。

あなたが私にふられた形になってしまったあの
日から。

クラスの中で変わったことといえばただ一つ
だけ。

ドッジボールのときに、私とあなたが敵に分
かれることがなくなっ
たこと。

あなたが手加減する

クラスほぼ全員の意見で、私だけは常にあ
なたのいるチームにされ
てしまいました。

普段はまったく話題にも上らないのに、

ドッジボールのときだけはいつまでもあ
なたの宣言が蒸し返された

というのも不思議な話です。

恋というにはまだ早いかもしれませんね。

今まで男子女子区別なく接していた自分が、あなたに対してだけは意識するようになった。

例えば、

授業中消しゴムを床に落としたとか、

頭を掻いたとか、

他の男子と悪ふざけをしているとか。

何の変哲もないあなたの姿がまるで特別な存在のように感じてしまう。

あなたが教室にいないときは、いつのまにか教室の窓から校庭にいるかもしれないあなたの姿を探している自分がいました。

誰もが皆同じようなことを経験するように、

あなたという存在が少しずつ少しずつ私の心の中へと入ってきたのです。

ただ、

あなたのことが好きになったとか、

付き合いたいと思いはじめたとか、

そういう感覚はまだありませんでした。

クラスの特定の男子に対して異性として意識しはじめた自分がいる、ただそれだけで

結局…

そんな状態が卒業式を迎えるまで続きました。

あなたはどう感じていたのでしょうか？

あの日を境に私に対する態度が変わるといふこともなく、卒業式を迎えるまでまるで何事もなかったかのように振舞ってきましたね。

ドッジボールのチーム分けを除いては、クラスのみんなも同じでした。

卒業式の日、

女の子は皆お気に入りのノートを準備して、友達から一言ずつ思い出の言葉を書いて貰います。

私も同じようにみんなから一言ずつ書いて貰うため走り回っていました。

男子からも沢山書いて貰いましたが、ノートをあなたに持っていたときだけはとても緊張してしまいました。

あなたが他の女子に対して書いた言葉より特別な何かを期待していたわけではありませんが、

同じ内容でも私にとっては特別に感じてしまうところが不思議です。

中学になっても一緒に頑張ろうぜ！

たったそれだけの言葉です。

あなたが書いた後の、

他の友達のノートが私に回ってきたとき…

ごめんなさい。

あなたの文字を盗み見てしまいました。

何人目かのノートが回ってきたとき、

私は泣き始めていました。

周りには既に泣いている女子も沢山いたので、誰も不思議に思う人はいません。

中学になっても頑張ろうぜ！

あなたが他の女子に書いていた言葉。

他の男子と同じ様に、

誰に対してもみんな同じ内容。

でも私にとっては同じ内容のたった一言でも大きな違いがありました。

“一緒に”

あなたは私にだけ意識してそう書いたのか、たまたまだったのかは分かりません。

卒業生のほとんどが同じ中学に進むのです。

「一緒」の一言を入れても入れなくても再びみんな一緒に過ごすことに変わりはありません。

でも私にとってそれは特別な一言でした。

この日は嬉しくて嬉しくていつまでも涙が止まりませんでした。

いつのまにか私の中であなたの存在がそこまで大きくなっていったのですね。

*

私たちが付き合い始めたのは中学二年の春でした。

放っておくといつまで経っても何も起りそうにない私たちへ、

神様のちよっとした悪戯だったのかもしれない。

私が急性虫垂炎で入院し、あなたが友達に無理やりお見舞いに連れて来られたのがきっかけでした。

授業が終わると私の大の仲良しの由美子が学校の給食に出された食パンを持って毎日のように顔を出してくれました。

退院する少し前、あなたは結城君と二人でお見舞いに来てくれましたね。

結城君が無理やりあなたを連れてきたように思いましたが、

彼は私のお見舞いが目的ではなく別のクラスの由美子が目当てだったと、

後になって由美子自身から聞きました。

由美子はその後結城君と付き合い始めたそうです。

それにしても彼があなたを連れてこなかったら私たちには相変わらず何も起らなかったような気がします。

お見舞いにあなたがくれたノート

なんの装飾もなく、特別なデザインでもない普通の大学ノート。

何を考えてあなたがこのノートを選んだのか良く分かりませんが、

何かしらのお見舞い返しをしようと退院後にあれこれと考えました。

あまり遅くなっても失礼だと思いながら、結局一ヶ月近くそのままになってしまいました。

そして、私なりに考えたお返しの品は…

あなたから貰ったノートに私の気持ちを綴って、あなたへ返すこと。

とても勇気が要りました。

自分の気持ちを綴るといっても、そう簡単にはいきません。

何をどう表現したらいいのか、

自分自身が自分自身をよく理解していないのですから仕方がありません。

とにかくあなたとの繋がりが出来ればよかったです。

ただ、

あなたが迷惑に感じたらどうしよう…

もし何も返ってこなかったら…

そう思い始めると自分ではなかなか渡すことが出来ず、結局由美子からあなたへ渡して貰うよう頼んでしまいました。

あなたとはクラスが離れていたの、少なくとも普段は顔を合せな

いであることがそのときの私にとっては幸いでした。

しばらくして由美子があなたに渡したノートを持ってきました。

恐る恐る開いた中身は…

私は一瞬嘖き出してしまいました。

そしてしばらくすると今度は涙が溢れ出してきました。

由美子はそんな私をポカンとした表情で何も言わずに見つめていました。

私は、ゆっくりと由美子にあなたが書いたページを見せました。

「な、なにこれ、へったくそ」

そうです。

そこにはあの日、あなたがみんなに詰め寄られている姿と、そのとき叫んだ言葉が、下手な絵と一緒に描かれていました。

「へーえ、あいつも理恵のこと好きだったんだ。でも泣くほど嬉しい?」

不思議でした。

由美子がつうように、泣くほどのことではなかったと思います。

でも、どういいうわけか涙が溢れてしまいました。

長い間、少しずつ少しずつ育ってきた想いがひとつの形になってや
つとあなたに届いた瞬間でした。

あなたのことをいつの間にかこんなにまで好きになっていたんです
ね。

初めてそんなふうに意識しました。

「はいはい、ご馳走様。これからは直接渡してよね。私、中身見ち
やうから」

由美子はやってられないよといったポーズをとりながらも、顔は良
かったねと笑っていました。

そしてこのときから始まった

あなたとの交換ノート

あなたが普通の大学ノートを選んだおかげで、私たちの交換ノート
は単なる授業のノートの貸し借りのように見えました。

いかにもという感じで、あるいは人目を避けてなどと考える必要も
なく気軽に渡すことが出来ました。

今のように電話もあまりなかった時代。

お互いの気持ちを伝える方法は手紙くらいしかありませんでしたが、
同じ学校に通っていたので、交換ノートの方がお互い親に見つかる
心配がなく安心していろんなことが書けました。

自分の周りのちよつとした出来事や勉強の話、

それこそ、普通に読んだらなんにも面白くないことばかり。

今思い出してもよく飽きもせずにとと思うようなことばかり書いていました。

私は時折り、ノートの半ページくらい書くときもありましたが、あなたは多いときでも五行くらい。

大きな文字だったので、私の書く三行くらいの量にしかありません。それでも当時はノートが返ってくるたびにとてもわくわく胸を躍らせて新しいページのあなたの文字を確かめたものです。

不器用ながら一生懸命書いているあなたの姿が想像されて、それだけで自然と笑顔になれる自分がいました。

*

あの頃、私たちの教室は中庭を挟むように二つの棟に分かれています。

私が1組で、あなたが5組。

休み時間になると中庭を眺めるように沢山の生徒が窓から顔を出して、

次の授業が始まるまで友達とお喋りする風景がごく普通にみられました。

私も休憩時間は廊下に出て窓を開け、
中庭を眺めながらよく友達とおしゃべりに夢中になりましたが、
交換ノートが始まってからは私にとってそこは特別な空間に変わりました。

中庭の向こうの棟は教室の窓から直接中庭を見下ろせます。

教室の窓を開けて同じ様に中庭を眺めながらお喋りしている生徒が
沢山いました。

その中にあなたの姿を見つけたのです。

おそらくあなたもそちらから私の姿を見つけるのにそう長い時間は
必要なかったでしょう。

友達とお喋りしながら中庭を挟んで時折りあなたの方へ視線を向け
る。

あなたも私と同じ様に友達とお喋りしながら時折り私の方へ視線を
向ける。

うまくタイミングが合えば交差するあなたと私の視線。

なんて幸せな一瞬でしょう。

じっと見つめるのも変だし、

かといって視線を投げたとき、

あなたがこちらを見ていなかったらちよつと寂しい…

いつしかそんなやり取りが幾度となく繰り返されるようになりました。

休憩時間はほんの10分しかありませんが、教室を移動する体育や音楽のとき意外は、50分経ったらまた会えるのです。

一日の中でそういう時間が繰り返してくるのですから、私は授業に集中出来なくなっていました。

雨が降る日にはなかなか窓を開けられませんでした、それでもガラス窓の向こう側にあなたの姿を感じたものです。

私は雨が大嫌いになりました。

雨に罪はないのですが、よく雨粒の落ちてくる空を睨んだものです。

*

私の手が初めてあなたの手に触れたのは文化祭の時、お化け屋敷の中でした。

毎年行例のお化け屋敷はペアで入ることが条件。

誰と誰が付き合っているのか公表する場でもありませんでしたが、

単にお化け屋敷に入りたい女子が適当に男子を見繕って、

にわかペアを組むことも当たり前のように行われていました。

私たちはどちらに見られたのでしょうかね。

今、思い出しても胸が高鳴ります。

お化け屋敷の中に入るまでは何のそぶりも見せなかったのに、

中に入って最初の角で私が悲鳴を上げた瞬間、あなたの大きな手が私の手を掴みました。

その後はもう私はあなたの手に引かれるままついていだけでした。

お化けのことなんてまったく憶えていません。

お互いの顔も見えない暗闇の中であなたの手の暖かさだけが唯一確かなものに思えました。

出口の明かりが見えた瞬間、あなたはそっと手を離しました。

私も何もなかったかのように少し遅れてあなたの後から出て行きました。

なんとなく目を合せるのが恥ずかしくて、たぶんあなたもそうだったのでしょうか。

お化け屋敷を出てから私たちはしばらく前後になって何も話さずそのまま歩いていましたね。

いつの間にか私より背が高くなり、いつの間にか広くなった背中。

このとき前を歩くあなたの姿がとても大きく確かなものを感じられました。

由美子と結城君にばったり会ったことでやっとお互いに声を出す機会を見つけることが出来ました。

「暗闇の中で、別のペアと入れ替わっちゃって大変だったよ。私は別の男に手を握られるし、出口で相手の彼女は泣き出すし……」

由美子に睨まれた結城君がバツが悪そうに頭を掻いているのを見て、あなたも私も噴き出してしまいました。

なんかお似合いのカップルって感じですよ。

*

このころから私たち四人は学校が終わると途中まで一緒に帰るようになりました。

私と由美子は合唱部に所属していたのですが、

女子部員だけしかいなかったために臨時で男子部員が徴集されたのがきっかけでした。

顧問の先生のほぼ強制的な徴集により十人ほどが集められましたが、その中に結城君はともかく、あなたが入っていたのは意外でした。

スポーツ万能なあなたがどの運動部にも所属していなかったのもちょっとぴり不思議でしたが、

まさか合唱部に入ってくるとは夢にも思いませんでした。

あなたも最初はかなり抵抗していましたね。

放課後になるとよく顧問の先生に追いかけていましたが、

結局は担任の先生の説得に負けて入部することになってしまいました。
た。

あなたが神妙に歌う姿を見て私は何度噴き出しそうになったことか。

私も由美子もしばらくは練習になりませんでした。

さすがのあなたもスポーツで目立つのは全然平気なのに、

沢山の女子に囲まれてステージに立つのは最後まで慣れなかったみたいですね。

居心地の悪そうな顔を今もはっきり憶えています。

でもそのおかげで私たちは一緒に帰るきっかけが出来たのです。

校門から国道に出るまでは両側を畑に挟まれた真っ直ぐな一本路。

500メートルくらいの道を4人並んで歩いたのですが、

なぜかあなたと結城君の後ろを

私と由美子がついていくというスタイル。

何か変ですよね。

部活動が終わって、一斉に生徒が流れ出てくるわけですから、

男子生徒と女子生徒が細い一本路をこちゃ混ぜになって歩きます。

時々悪ふざけをして畑に落ちてしまつ男子生徒もよく見かけました。

国道に出ると、あなたと結城君は右へ、私たちは左へとそれぞれに分かれて帰るので、

知らない人から見れば二組のペアが一緒に下校しているというようにはまったく見えなかつたと思います。

それでも今までの下校とは違う、何か特別なものを感じている自分がいました。

人の心って不思議です。

何かのきっかけで周りの景色がどんなふうにも変わって見えてしまふわけですから。

逆に、たった一つの出来事が自分のすべてを絶望に変えてしまふことだってある、

このころの私にはそんなこと想像すら出来ませんでした。

*

私たちに最初の転機が訪れたのは、高校受験のとき。

あなたと由美子は地元の高校へ、
私と結城君は隣の市の高校へと進み、

初めて離れ離れの学校生活を送ることになってしまいました。

この時の私は特に将来のことを具体的に考えていたわけではありませんでした。

なんとなくぼんやりと大学受験を想像していたに過ぎません。

でも

あなたは違っていましたね。

「高校出たら、おれは船に乗る」

はつきりと将来の自分の姿を見据えて、普通科ではなく水産科へと進んだあなた。

あなたの実家は昔から漁業関連の仕事をしていましたし、

もともとここは漁業の町として発展してきたこともあり、

高校を出て船に乗る人は沢山いました。

サラリーマンのような年功序列がなく、

高校出たばかりの人でも船に乗ればそれなりのお金が入ってきます。

若いのに立派な家を持つ人も全然珍しくありません。

私の父は公務員だったので、普通に高校・大学を出るといった考え方が当たり前の世界。

勉強が出来なくて普通科にも行けない者が水産科や商業科に行く、そんな偏見さえ持たれていた当時、

決して成績が悪い方ではなかったあなたが自らの意思で選んだ道です。

そういう意味ではあなたの選択は間違っではないません。

でも

私たちが交際していると知ったら私の両親はきっと激怒していたことでしょう。

「理恵はものすごく勉強が出来るんだから、一番いい学校に行け」
今度は、

“一緒に”

とは言ってくれませんでしたね。

私にとってはあなたから少し突き放されたように感じてしまいました。

いつまでも子供じゃいられない、

これからは自分の立ち位置は自分で考える……と。

私はあなたと同じ高校でもいいと思っていました。

勉強なんてどこにいても出来ると思っていましたから。

でも私の両親は田舎とはいえ一番の進学校へ行けるのであればそうして欲しいと強く思っていたので、

結局は両親の希望に沿った形の進学になってしまいました。

由美子があなたと同じ高校だったおかげで、幸いながら交換ノートは彼女を通して続けることが出来ました。

彼女にとってはいい迷惑だったでしょう。

結城君に渡してあげるよと彼女にも交換ノートを勧めてみましたが、

「証拠物件残すなんて、考えられない」

と一笑されてしまいました。

中学のときみたいに頻繁にはいかない上に、普段会えない分だけ私は一度に書く量が多くなりましたが、

あなたは相変わらず多くても五行程度でした。

「二週間だったの五行、もうちょっと何とかならない？」って

愚痴ったこともありましたね。

あの頃私たちは、
結城君と由美子、そして私とあなたの四人で、月に二回は一緒に過
ごしました。

由美子たちも二人だけで出かけることはなく、何故か会うときはい
つも四人一緒でした。

時々映画も見に行きました。

あの頃見た映画であなたは何が一番好きですか？

私は「いちご白書」と「小さな恋のメロディ」が今でも大好きです。

試験が近くなると

よく市の図書館にも行きましたね。

あなたはとてつまらなそうにしていたのを憶えています。

まじめに勉強している私たち三人から少し離れて小説を読んでいる
ときもありました。

そういえばあなたは私と付き合うようになってから小説を読むよう
になったと話していましたね。

私が学校の図書館によく足を運んでいたので、あなたもなんとなく
図書館に現れるようになり、

その頃私が借りていた本に興味を持ち始めたのがきっかけだったと

思います。

私が借りていそうな本をまるで宝探しのように探し出して、図書館カードに私の名前を見つけては喜んでいましたね。

私の名前の後ろに自分の名前を書くために同じ本を借りて、そのうち、本の内容にも興味を持ち始めて。

思い出せば当時は何て健全な仲良し四人組だったのでしょうか。

若い男女が二人肩を並べて歩くには田舎ではまだ相当の勇気が必要だったこともありましたが、

今の時代から見れば、都会でなくともただの友達レベルです。

それでも、特別な関係と信じて疑わなかった二つのペアがそこにいたことは紛れもない事実でした。

*

私たちが初めて二人だけで過ごしたのは、高校三年の夏祭りの夜。

この日、私は東京の大学を受験することをあなたに告げました。

由美子は京都の女子大を、結城君は私と同じ様に東京の大学を狙っていることも話しました。

だから高校を卒業するとみんな離ればなれになり、

今までのようには交換ノートも由美子には頼めなくなってしまいました。

「そうか…」

あなたは一言そう呟いたまま黙り込んでしまいました。

進学校へ行けと言ったのはあなたの方なので、今更離れるな、傍にいろとは言えなかったのでしょうか？

でも仮にあなたが傍にいてくれと言っても、私はこのとき既に受験する決心をしていました。

一時期離れて暮らしてもいつか一緒になる、

私の中でかつてあなたから貰った“一緒に”は、

いつのまにか“結ばれる”という意味に変わっていました。

どんなに離れて暮らしていても、この町に戻ってくればあなたがいる、

寂しくなればいつでも戻ってこられる場所がある、

私にとっては

あなたも、あなたのいる故郷の町も、

いつまでも変わることなく私を包み込んでくれる大きな大きな存在になっていました。

だから、一人で東京へ出て行くことにためらう理由は何もありませんでした。

「夢を叶えたら帰ってくるよ」

私の言葉にあなたは少しびっくりしたような表情を見せましたね。

今まで自分の意思をここまではっきりとした言葉にして伝えたことはなかったのですから、あなたが驚いても不思議ではありません。

「ゆめ？」

「医学部を受けるの。私、医者になる。そしていつかこの町に帰ってきて開業する」

医学部と聞いてあなたはもう一度びっくりした顔を見せましたが、

それよりも、

その後あなたの口から出てきた言葉は私にとってあまりにも信じられない言葉でした。

「医者と漁師じゃあ、釣り合わないな……」

「……？」

背を向けてゆっくりと歩き出したあなた。

私の周りから一瞬にして消えてしまった祭りの喧騒。

私があなたの言葉の意味を理解するのにそう長い時間は必要ありませんでした。

その場に立ち止まったままの私。

しだいに滲んでいくあなたの後ろ姿。

たった数メートルの距離なのに、こんなにもこんなにもあなたを遠く感じたことは今まで一度もありませんでした。

あなたはあなたの意思で漁師になることを選択しました。

なのに、どうしていまさらそんなことを言うのでしょうか？

別々の高校に通い、月に二度くらいしか逢わなくても、私はいつでもあなたの存在を間近に感じて過ごしてきました。

あなただって同じだと思っていました。

私はあなたの高校生活を実際に見てきたわけではありませんが、

スポーツ万能のあなたはいろんな運動部から引つ張りだこで、

大会の前には臨時部員としてよく助っ人にもかり出されている、

成績もそれほど悪くなかったので女子にはけっこう人気があると、

由美子からはしょっちゅう聞かされていました。

「私がお目付け役となって、みんな追い払っているのよ。おかげで私は嫌われ者よ」

彼女はいかにもそれを楽しんでいるかのようにも見えました。

私は、特に目立つ方ではありませんでしたが、試験の上位成績者が張り出されるときは常連だったこともあり、名前はそれなりに知られていたようです。

何度か告白されたこともありました。

でもまったく興味はありませんでした。

私には“あの日”からあなたという存在があり、その中では周りの異性はみな小さなつまらないものしか見えなかったのです。

しばらくして私が付いてきていないことに気付いて戻ってきたあなたの頬を、

私は思いっきりひっぱたいていました。

びっくりして立ち止まる周囲の人たち。

でもこのときの私にはあなたの姿しか映っていませんでした。

今思い出しても、不思議なほど人前で恥ずかしいという感覚はまったくありませんでした。

溢れる涙を拭いもせず、

あなたを睨みつけるようにして叫んでいた私。

「二度と言わないで！」

「……」

「聞こえなかった？ 二度と言わないで！」

「お、俺は……」

自信なさそうに眼を逸らしたあなたをもう一度ひっぱたいていた私。あなたに対してこれほど直接的に感情をぶつけたことは今まで一度もありませんでした。

きつとあなたも驚いたことでしょう。

でも一番驚いていたのは私の方なのです。

喧嘩らしい喧嘩だったことはなかったし、あなたに対して大きな声さえ出したことはなかったのですから。

嫌われたかもしれない……

そんなふうに思いながら私はあなたに背を向け、一人で歩き始めていました。

すぐ傍にあなたがいるのに、なんでこんなに寂しいの？

どうしてこんなに涙が溢れてくるの？

それでも人ごみの中をしばらく歩いていくうちに昂ぶっていた私の感情も少しずつ少しずつ平静を取り戻してきました。

そしてその頃になってから恥ずかしさが一気に吹き上がってきて、

あなたが後ろから何も言わずに付いてきていることはわかっていたいましたが、

今度はなかなか振り向くことが出来ませんでした。

でも、せっかく初めて二人で過ごすお祭りの夜なのに、いつまでも仲直りしないわけにもいきません。

私はあるお店の前で立ち止まり、

「あれ」

と言って、あるものを指差しました。

あなたも立ち止まり、

しばらくは怪訝な表情で私の指差す方向にあるものを見つめていました。

私のおねだりしたものを理解したあなたはそのまましばらく私の顔を見つめていましたが、

私はわざとあなたの方は見ずに、

「あれ、買って」

と催促しました。

あなたは何も言わずに、私の要求どおりにそれを買いました。

「来て」

一人でさっさと歩き始めた私の後ろをあなたはやはり何も言わずに付いてきました。

このときのあなたは驚くほど私に対して従順でしたね。

きっと私の泣き顔を見てどうしたらいいのか解らなくなっていたのでしょうか。

人通りの少ない場所までやってくると私はあなたに

「それ、はめて頂戴」と

徐に右手の薬指を差し出しました。

あなたにはめて貰ったおもちゃの指輪をしばらく眺めていた私。

黙ったまま私の傍に突っ立ったままのあなたに、私の方から口を開きました。

「さっきはごめんなさい」

「……」

「びっくりしたよね」

「…ちょっと…」

「私も、自分にちょっとびっくり…」

「………」

「痛かった？」

「…いや…」

「私は痛かったよ」

「…手…？」

「馬鹿」

「………」

「涙が出るくらい痛かったよ」

「………」

「二度と…、言わないでね」

私はもう一度念をおしました。

でも、あなたからは何も返ってこない。

「ふうっ…」と

半ばため息のような一呼吸をおいて、

私はあなたの本意を確かめようと思いました。

「高校卒業しても、私はどこにも行かずにあなたの傍にいた方がいい？」

「…それは…」

言葉を詰まらせるあなた。

わたしも本当は傍にいたい。

それだけはうそ偽りのない気持ち。

「あなたがそうして欲しいなら私は」

「それ以上言うな！」

「……」

「俺は、理恵にそんなこと少しも望んでいない」

たぶん、そういう答が返ってくるとわかっていました。

でも、私が欲しいのはそんな答ではありません。

「だったら……」

「……」

「だったらあんなこと二度と言わないで」

「……」

「いいえ、言わないだけじゃダメ。そんなふうに思ってもだめ。絶対に思わないで、お願いだから」

「理恵……」

「私の眼を見て」

「……」

「誓って」

「誓って?」

「私を…、私のことをしっかり受け止めてくれるって」

「俺は、いつだって理恵のことしか考えられなかった。あの日からずっと、そしてこれからもずっと」

「あの日って?」

「…ドッジボールの…」

そう言いかけたあなたの言葉を遮るように…、

私は自分の方からあなたの唇に自分の唇を重ねていました。

私の方からなんて、自分でもびっくりしました。

今思い出しても赤面してしまいます。

あなたと交換ノートが始まってからこのときまで殆んど手ぐらいしか触れたこともなかったのですから。

ほんの一瞬触れただけでしたが、私にはとてつもなく長い時間に感じられました。

あなたを好きになってから今日までのすべてが今この一瞬に凝縮されてきたかのよう……。

あなたはしばらく呆然としていましたね。

「もし私のこと嫌いになったら、はっきりそう言ってね」

「変なこと言うな」

「あなたが先に変なこと言うから……、私の方がおかしくなっちゃったんじゃないの」

あなたはバツが悪そうに少しだけ笑って見せると、

「行くっ」

そう言いながら私の手を引いてゆっくりと歩き始めました。

「来年、船に乗ったら今度は本物を買ってね」

私の言葉にあなたの横顔がほんの少しだけ頷いたように見えました。ずっとならぬと後になってから知ったのですが、このころ私とあなただが交際していることに薄々気付き始めたあなたの両親が、あなたに對していると言っていたそうですね。

漁師の家に育った娘でないと漁師の嫁は務まらないとか、

ケジメをつけるならお互い傷の浅いうちがいいとか、

出来の悪い息子が進学校に通うお嬢さんを傷物にしたと言われたくないとか…。

あなたは私のことを大切に氣遣ったつもりだったのかも知れませんが、

でもそれは大きな間違いです。

私の心を置き去りにしたままで、あなた自身が知らず知らずのうちに

自分の氣持ちをごまかそうとしていたわけですから。

私が幸せかどうかは私が決めることで、周りの人が判断することではありませんが、

私にとってはあなたの存在そのものに大きな意味があり、

釣り合うとか釣り合わないとか、そんな次元の話ではなかったのです。

す。

第二章

約束

卒業、そして旅立ちの日。

発車を告げる長いベルが鳴り終わり、
列車のドアが閉まると

ホームのざわめきが突然途切れました。

そしたら涙が溢れてきてもうどうしても止めることが出来なくなりました。

両親には心配をかけたくなって、

列車がホームを離れるまでは絶対泣くもんかって思っていたのに駄目な私。

見送りの人たちの中で、あなたは一番後ろの方にいたので気付かなかったでしょう。

小さく手を振るあなたの瞳が、
元気で頑張ってこいよって言うてくれているように見えました。

ゆっくりと動き始める列車、

遠ざかっていくみんなの姿。

両手をドアに当てたまま、
しばらく動けずにいた私。

こんな涙でぼろぼろになった顔では恥ずかしくて座席にも行けませ
ん。

私はドアのガラス越しにしばらく見慣れた風景を眺めていました。

雨が降っても雪が降っても毎日毎日通った路。

18年間、私を育ててきてくれたこの町は小さな漁業の町ですが、
あなたという最も大切な人も育ててくれた特別な場所でもありまし
た。

田舎育ちの私がつった一人、都会で暮らし始めるのですから、不安
がないといえは嘘になります。

数えればきりがありませんが、沢山の不安の中でも、私たち二人、
お互いが遠くに離れて暮らすうちにいつの間にか心まで離れていつ
てしまうのではないか、そちらの不安が一番大きかったように思っ
ます。

でもその不安はむしろあなたの方が私より大きかったのではないのでしょうか。

周囲を取り巻く人も環境もまったく変わってしまうのは私の方だったのですから。

何もかも変わってしまう生活の中で、私は今までのようにあなたを想い続けることが出来るのでしょうか？

たった一人で上京することを決めてしまった私に対して、あなたはいつまでも変わらずに私を待ち続けていてくれるのでしょうか？

今はただあなたとの絆、信じさせてください…

今更そんなこと思っても仕方がないのに、また涙が溢れてきて、私はいつまでたっても座席に行くことが出来ませんでした。

由美子は京都で一人暮らし、結城君も一人暮らしが始まりましたが、私と同じ東京でした。

みんなバラバラになりましたが、東京で結城君とは時々会うこともありました。

由美子は何かと理由をつけて東京にいる結城君に会いに来ていました。

そのおかげで、私たち三人は思ったほどバラバラに離れてしまったという感覚はありませんでした。

中学の時から始まった交換ノート、続けることは物理的に不可能な

ことではありませんでしたが、もしも紛失したらという不安もあって、私が上京してからは手紙へと変わりました。

相変わらず私から書く方が多かったけれど、交換ノートで訓練したおかげでしょうか、何とか途切れることなくあなたからの手紙も少しずつ増えていきました。

一足先に社会人になったあなたの文面は、精神的にはのんびり過ごしている学生の私とは明らかに違ってきましたね。

高3の夏、

あなたが私を怒らせたあの夏祭りの夜のような中途半端さはなくなっていました。

何かがつしりとした逞しさみたいなのがあふれ出してくるのを感じる事が出来ました。

ポストに見慣れた文字の封筒を見つけたときは、靴を脱ぐ時間さえ惜しくて、玄関でそのまま読むこともよくありました。

一人暮らしを始めるととても行儀が悪くなりますね。

あなたのせいにしておきましょう。

それにしても本当に男の人って不思議です。

あなたは私の中でどこまで大きくなっていくのでしょうか。

*

私が上京してから最初の帰省は夏祭り。

大学生になって少し変わったのは、浴衣を着たこと。

あなたの手に引かれ、私は少し頬を染めながらあなたの横顔を何度か盗み見ました。

あなたは船に乗るようになってとても引き締まった顔になっていました。

「久しぶりね、こうして肩並べて歩くなんて」

「ああ」

そっけない返事

でも不思議なほどしっかりと伝わってくるあなたの気持ち。

今夜は何をおねだりしようか…

そんなことを考えながら何度かあなたの背中をつつきました。

そのたびに触れ合うあなたと私の視線。

それは中学のときの、あの離れた校舎で触れ合ったお互いの視線と何も変わっていませんでした。

それから私たちは、金魚すくいをして

（戦績は十五匹対二匹で私の勝ち）、

浴衣にあつからとほおずきを買いました。

それから綿菓子を買って、それをほおばりながら、やがてたどり着いたのはあの一年前の思い出の場所。

「あっちに行つて、少し痩せたみたいだな」

「東京の生活にも慣れたから、これからは太る一方よ」

「ちよつと綺麗になつたな」

「ちよつと？」

「いや、そこに大きな意味は……」

「痩せたから？」

「そういう意味でも……」

「慣れないせりふ言うつからよ」

少し意地悪する私。

「あなたは、急に大人っぽくなつたね。同級生じゃなくなつちやつたみたい」

「体力には自信があつたけど、思っていたより結構きついよ」

「うん」

今日の前にいるあなたを見ていてよくわかる、私は少しだけ頷きました。

「ゆび」

「？」

「右手、出して」

怪訝な顔で右手を差し出す私。

あなたがポケットから出したのは金の指輪でした。

「憶えていてくれたの？」

「…二回もひっぱたかれたからな」

「…ひどい」

あなたからはめて貰った金の指輪をしばらくだまつたまま眺めていた私。

「安物だけど、一応…本物」

「……」

返事をしない私にちよつと不安そうなあなた。

このとき気付きました、私って結構意地悪な性格なんだ……。

「こんなのじゃ、だめ」

突然不満そうな声を出して、あなたの心に揺さぶりをかける私。

「…気に…いらない？」

そうそう、もうちょっと不安そうな顔して。

「気に入らない」

指輪をはずし始める私を悲しげな顔で見つめるあなた。

私ははずした指輪をあなたに差し出すと、

「やり直して」

そう言って今度は、左手を差し出しました。

このときのびっくりしたあなたの顔は今でもはっきり思い出せます。

あなたは無言のまま、今度は私の左手の薬指に指輪をはめてくれましたね。

左手の薬指に輝く指輪を眺めるうちに、涙が溢れ出してきました。

私はいつの間にこんなに泣き虫になってしまったのでしょうか。

きっとあなたと出逢っていなかったら、私はあまり泣く女の子ではなかったと思います。

嬉しかったり悲しかったり、とにかくあなたの前では本当に泣き虫になったと思います。

「理恵が帰ってくるまで待っている、帰って来たら迎えに行くから」

「駅まで迎えに来てくれるの？」

「バカ」

一年前の夏は大喧嘩だった。
一方的な。

それでもこうして二人、同じ時の流れを見つめていた。

風鈴の音、

はじける花火、

あなたは私にとって故郷そのものでした。

*

今のように電話がいつでもどこでも使えるような時代ではなかった
ので、めったなことでも電話をかけることはありませんでした。

それでも時折、どうしてもあなたの声が聞きたいと思うときが何度
かありました。

大学は勉強しようと思えばいくらでも出来、遊ぼうと思えばいくら

でも遊べる場所でした。

私がいた当時の大学は学生運動が色濃く残っていて、運動に参加していた友達はそれなりに充実していたのかもしれませんが、私にはどうしても理解できませんでした。

彼らとは常に距離を置いて本気で関わることはせず、本来の勉強に打ち込む毎日を過ごしていました。

医学部はそれなりに大変で、学費も他の学部に比べると高く、私はアルバイトをして少しでも家計に負担をかけまいと頑張ってきました。

ストレートで卒業してストレートで医師の国家試験に合格する、そして開業できるだけの力を身につけたら、あなたのいる故郷へ帰る、それがその頃の私のただひとつの目標でした。

私があなたに電話をかけるときは比較的元気なとき。

辛くて辛くてどうしようもないときに

あなたの声を聞いたら絶対にその場で泣き出してしまっ、

安心してあなたが船に乗れなくなる、それが解っていたからあなたの声が聞きたいと思うときほどかけられなかったことが私にとっては実は一番辛いことでした。

時折り電話をしたときは、あなたはいつも

「コレクトコールにしたらいいのに」

って言ってくれましたね。

「そんなに頼り無い女の子なの？」

私はわざと拗ねた振りをする、

そんな何でもないやり取りさえ、

私には大切なかけがえのない一コマだったので。

何気ない私の言葉のひとつひとつをまるで両手で受け止めるように
頷くあなたの声、

懐かしいあなたの声を聴くたびに、

故郷に帰りたい、

故郷に帰りたい と

電話を切った後で、その場に蹲って泣いたことも何度も何度もあり
ました。

*

二年目の冬、成人式の二日前、

私の方からあなたに電話をかけました。

お正月に話したばかりだったので、

このときは何かどうしても今すぐ、
あなたの声が聞きたいと思ったのです。

「成人式には帰れないよ」

「そう」

「お正月も忙しくて電話だけだったね」

「ああ」

「ねえ」

「なに？」

「私の振袖姿見たい？」

「…見たい…に決まってるだろ」

「明日送るよ、昨日、同じ様に実家が遠くて帰れない友達と一緒に、
写真館で撮ってもらったんだ」

「漁から戻ったら、じっくり眺めさせて貰っよ」

「いつ戻ってくるの？」

「なあ」

「なあに？」

「あと何年？」

「……」

「あと何年経ったらこっちに帰ってくるんだ？」

「……ごめん。最短でも……あと5年」

「……5年……か」

「……うん」

「……」

「待てない？」

「理恵とはもう何年付き合ってると思ってるんだ？」

「そうだね、だから諦めて」

「ああ、諦めてじっくり待たせてもらいます」

「迎えに来てくれるんでしょう？」

「駅まで行くよ」

「ばか」

「風邪、ひくなよ」

「うん。あなたもね」

「じゃあ」

「うん、おやすみなさい」

そしてこのときが、あなたの声を聞くことの出来た最期の夜になりました。

三日後の朝、

突然かかってきた悲鳴のような電話。

由美子からでした。

「理恵、大丈夫？」

「…大丈夫って？」

「まだ、連絡ないんだ……」

「連絡？ なぁに、何かあったの？ 私に関係あることなの？」

「…気を確かにしてしっかりしてね。船が…彼の船が帰ってこないの」

「え？」

「昨日の夜から連絡が取れなくなってるって。本当ならもう港に戻ってきている時間なのに、今もまだ連絡が取れないって」

「……」

「もしもし、理恵、聞いてる？　もしもし」

「聞いてる……」

「どうする？　すぐに帰って来るでしょ？　私はまだ田舎にいるよ」

「…わたし…が、帰って…どうなるの？」

「え？　何言ってるのよ！」

「私が…帰ると、…あの人の船も帰ってくるの？」

「理恵、しっかりして！　とにかく帰ってきて！　いい？　すぐに支度して！」

私は特に取り乱すでもなく、淡々と由美子の声を聞いていました。

そして彼女からの電話の意味するところをほぼ正確に理解していました。

生まれたときから漁業の町で育ってきたのです。

同じような話は今までも何度か聞いてきました。

冬の日本海で遭難する、
そのことが何を意味するのか

理解することはそれほど困難なことではありませんでした。

ただ、その事実を受け入れられるかどうかは別として。

電話を置いて、私は慌てるでもなくゆっくりと帰省の準備に取り掛かりました。

数日前の夜にあなたの声が突然聞きたくなって私の方から電話をかけましたが、
虫の知らせだったのでしょうか。

あなたが漁に出る前に最期の声を聞いておけという……

まさか成人式のあとにこんな形で故郷へ向かう列車に乗り込むことになるとは思ってもみませんでした。

いいえ、思ってもみなかったといえば嘘になります。

漁師をやっているのだからこういう事態になることもあるってことはむしろ承知のはず。

ただ意識的に考えようとしていなかったただけの話です。

おそらくそれは私だけではなく、漁師をやっている家の人も皆同じなのだと思います。

ただ、実際に漁船の遭難は時々起こるわけで、それがたまたま今回

はあなたの乗っていた船だったのです。

東京駅から大学の友達へ電話を入れ、そして由美子にも今から帰るという連絡を入れました。

「まだ、船と連絡が取れない」

由美子の力ない声に、私は「そう」と返すしかありませんでした。

一人揺られるシート。

列車の窓に流れる景色のすべてがモノトーンに変わりはて、

四角い窓に切り取られた時間だけが私を置き去りにして通り過ぎていくようでした。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

不意に男の子に話しかけられました。

「大丈夫だよ」

一生懸命笑ってみせる私。

「何処か痛いのか？」

「大丈夫だよ。大丈夫」

「おかしいよ、笑ってるのに、涙が出てる」

私、気付かないうちに泣いていたみたいです。

「おかしいね」

それでも笑いながら返事をする。

「お薬持って、またあとで来るね」

少年は自分の座席へと戻っていきました。

きつとトイレの帰りに、 たったひとり泣いていた私を見つけて心配してくれましたでしょう。

少年が去った後も、

「大丈夫だよ、わたしは大丈夫」と
自分自身にそう言い聞かせていました。

「はい」

少年はすぐに戻ってきました。

差し出した手には胃腸薬の袋がひとつ。

「お母さんがこれ持って行きなさいって」

きつとお腹が痛くて私が泣いていると思ったのでしょう。

「ありがとう…」

私は涙を拭いながら少年から胃腸薬を受け取りましたが、少年にお返しする何も持っていないことに気付きました。

「もう泣かないでね」

そう言っただけで帰ろうとする少年に、

「後でまたきてね」と手を振りました。

少年が来る前に車内販売でチョコレートでも買っておこうと考えながら。

その後も少年は何度か私のもとを訪れました。

私の隣のシートが空いていたので、時々一緒に座ってお喋りしたりもしました。

7時間も一人で列車に揺られていたら、私はきつとおかしくなっていたかもしれませぬね。

*

私を乗せた列車が故郷の駅に辿り着くと、ホームでは由美子が待っていました。

由美子は列車から降りてくる私の姿を見つけるとすぐに駆け寄り、

「このまますぐ、漁協に行こう」

そう言っつて私の手を引つ張るようになつて歩き出しました。

「連絡は取れたの？」

由美子の表情から、いい知らせはまだないのだろうなと思ひながらも、私はそう訊ねずにはいられませんでした。

私の少し前に行く由美子の後ろ髪がかすかに左右に揺れたように見えしました。

漁協についてみると、そこは家族や組合の人たちでいっぱいでした。

警察の人もいました。

私たちは邪魔にならないよう隅の方で見ていることしか出来ませんでした、

ここにいれば一番早く新しい情報が得られることも事実。

他に沢山集まつてきている人たちも皆、そういう思いの人たちばかりのほずです。

声を荒げる人、

泣いている人、

時折り響き渡る電話の呼び出し音、

その度に電話に集中する視線。

張り詰めた空気が滞留する中で

私の眼から入ってくる風景とは逆に、聞こえてくる音はどんどん小さく遠ざかり、

次第に私はまるで無音の映画でも見ているような錯覚にとらわれていきました。

私より由美子の方が時々感情的になって泣き出すので、この時はむしろ私の方が彼女をなだめていたように思います。

私は今どうしてこんなに落ち着いていられるのでしょうか？

答えは簡単です。

どうしたらいいのか分からなかっただけ。

どんな表情をしたらいいのか、

どんな声を出したらいいのか、

どんな態度をとったらいいのか、

いつまでここにいればいいのか、

立って待てばいいのか、座って待てばいいのかさえ分からなかった。

だから無表情でいるしかなかったのです。

「あなたはもしかして？」

私たち二人の前で立ち止まり、話しかけてくる年配の女性がいました。

由美子はすぐにペコリと頭を下げました。

「あなたが、理恵さん？」

その女性は、私に向かってそう訊ねました。

あなたのお母さんでした。

私は「はじめまして」と答えました。

「だから言わんこっちゃない」

あなたのお母さんの後ろで、険しい顔の男性が吐き捨てるように呟きました。

「あなた！」

あなたのお母さんは振り向き、嗜めるようにその男性に向かってそう小さく叫びました。

あなたのお父さんです。

あなたのご両親と直接言葉を交わしたのはこのときが初めてでした。

「先に車に行ってるぞ」

あなたのお父さんはそのまま漁協の事務所から出て行きました。

「あなたのことは息子から聞いていました。」

こんなことになってしまって、申し訳ない、許してね。あの子は、あの子はあなたのこと……」

あなたのお母さんはそこまで言いかけて、言葉を詰まらせてしまいました。

「まだ、そうと決まったわけではありませんから……」

私にはそう答えるのが精一杯でした。

「ごめんなさい。こんなときに逆になぐさめられちゃって」

私は無言のまま首を横に振りました。

「主人のあんな態度みて、がっかりしたでしょ」

「いいえ……」

あなたのお母さんは私たち二人に少しだけ会釈すると、そのままあなたのお父さんを追いかけて出て行きました。

それから何時間が過ぎたのでしょうか。

「あんたたち、まだいたのか？」

声をかけてきたのはあなたのお父さんでした。

時計を見ると夜の九時を少し過ぎていました。

「ここにいても仕方がねえ。帰った方がええ」

由美子はちらりと私の方を伺いましたが、

私は

「いいえ、帰りたくありません」とすぐに答えていました。

「若い娘がいるような時間じゃねえ」

「家に帰っても仕方ありませんから。私の家は漁業とは無縁ですから、家に帰っても何の連絡も来ません。」

「明日までいるつもりか？」

私はその問いには答えなくて

「由美子は帰った方がいいわ」と彼女には帰ることを勧めました。

「私もここにいる」

彼女も腰を上げようとはしませんでした。

「飯は喰ったか？」

「……」

「その様子じゃ、二人とも何も口にしてねえな」

私と由美子はこのときになって初めて、駅を降りてから二人とも何も口にしていないことに気が付きました。

でも、とつてもじゃないけれど食べたいという気持ちにはなれませんでした。

あなたのお父さんは、しばらく漁協の人たちと何か話をした後、再び私たちの前にやってきました。

「うちに来るか」

「……」

「少なくともここよりは暖かい。うちなら何かあれば連絡もすぐ来る」

結局、私も由美子もあなたのお父さんの言葉に甘えることにしました。

私たちはあなたのお父さんが運転する自家用車に乗せられ、そのままあなたの自宅へと向かいました。

激しく打ち付ける雨を掻き分けるように進む車。

漆黒の闇の中に荒れ狂う海は車の窓からはまったく見えず、

ただエンジンの音とワイパーの音だけが私たち三人を包み込むように響いていました。

あなたの家に到着すると、あなたのお母さんがすぐに食事の用意をしてくれました。

申し訳ないと感じながらも、私も由美子もなかなか箸をつける気持ちにはなれませんでした。

「ちょっといいかしら」

俯いたままの私たちを見かねてか、しばらくしてあなたのお母さんが話しかけてきました。

「由美子さんとは今まで何度かお会いしたことも話したこともあるけど、理恵さんとはたぶん初めてよね」

「…はい」

「いつ、こちらへ」

「…朝、東京を発って、夕方…」

「じゃあ、おうちには顔出さず？」

「はい、直接漁協の方へ…」

「ご両親はあなたが帰ってきてること、ご存知なの？」

私はこのときになって初めて、実家には何の連絡も入れていないことに気が付きました。

「……」

「由美子さんは？」

「わ、私は成人式で戻ってきていたのでそのまま…でも、今日のことはまだ……」

「ふう…、困った娘さんたちだこと…」

あなたのお母さんは少しため息混じりに言いました。そして、

「理恵さんは、明日帰ってきたことにした方がいいわね。由美子さんは、すぐにおうちに電話しなさい。途中で私が替わって事情をお話しするから」

そう言って立ち上がり、由美子をつれて電話の置いてある居間の方へと行きました。

時計の針はもう22時を回っていました。

きつと何の連絡もなく帰ってこない娘に、由美子のおうちは大騒ぎだったかも知れません。

私はあなたのお母さんの言うとおり、明日の夕方まで待って電話を入れることにしました。

朝、電話すると帰ってくるなどと言われることは容易に想像できたので、こつちに到着してすぐに電話を入れた、友達の乗った船が遭難したと聞いて何も考えずに列車に飛び乗った、そういうことにして

おいた方が良いと思ったからです。

程なくしてあなたのお母さんと由美子が戻ってきました。

「さあ、あなたたち、少しは食べておきなさい」

テーブルに着くとあなたのお母さんが私たち二人に再び食事を摂ることを勧めました。

それでもなかなか箸を持つ気になれない私。

そんな私を嗜めるようにお母さんが話し始めました。

「漁に出るとね、一生のうちにこんなことは幾度となくあるの。」

その度に食事も摂れなくなっていたら、海の男の妻は務まりませんよ。

やっとの思いで帰ってきた男達をいつもと変わらぬ笑顔で何も無かったかのように出迎える、

だからこそ男達も安心して家庭のことをすべて任せ、再び海に出て行くことが出来るの。

理恵さんと言ったわね。

息子があなたのことを好いている事は知っていました。

でも、私たちはずっと反対してきました。

さつき、漁協で主人の言葉を聞いたでしょ。

あなたに海の男の妻は務まらない、

町中の噂にならないうちに別れなさいと、

あの子が船に乗る前から何度も言い聞かせてきました。

でも、結局あの子はあなたのことを諦めなかった。

現実を甘く見ているのか、本当に心底あなたのことを愛しているのか、私にはよく分かりません。

でも、ご両親に連絡を入れることさえ忘れるほど思いつめて帰ってきたあなたの気持ちは私も大切にしたい。

だからね、覚悟を決めて食べて頂戴。

こんなことで食事も摂れなくなるような娘さんなら本当にあの子の嫁とは認めてあげませんよ」

静かな話し方でしたが、そこには長く海の男を支えてきた女性の厳しさが滲み出ていました。

好きだから一緒にになりたいという気持ちと、家庭を支えていくという覚悟とはまったく違うもののだと教えたかったのでしよう。

由美子は少しびっくりした顔で、私とお母さんの顔を交互に見ていました。

何もこんな時にそんな言い方しなくてもと、思っていたのかもかもしれません。

私は、お母さんの言葉に何かを返すでもなく、やがてゆっくりと箸を握りました。

“あの子の嫁”

お母さんはそう言いました。

頑張つて食べればあなたとのことを認めてくれると言つことでしょうか。

私は「…いただきます」と一言呟いて、鉛のように重いご飯を口へと運び始めました。

私が食べ始める姿を見て、同じように由美子も箸をとりました。

このときの食事がどんな味だったのかなんてまったく覚えていません。

それでも、お母さんが温め直してくれたお吸い物を啜っているうちにやがてお腹の中も温まり、張り詰めていた糸が少し緩んだのでしようか、帰ってきてから一度も見せていなかった涙が突然溢れ出してきました。

そして一度流れ始めるともう止めることなんて出来ませんでした。

「わたし、泣いてなんかいませんから…」

それでもお吸い物を啜り続ける私。

涙を見られたらお母さんからまた厳しいことを言われてしまう、そんなふうにした私は、嘘でも強がって見せるしかありませんでした。

「わかってるわ……」

そう言ったあなたのお母さんの声にはついさっきまでの厳しさはなく、とても優しい声でした。

私はその声に、今までずっと我慢してきた分まで取り戻すかのようによつたまにか声を出して泣き始めていました。

それでも箸だけは止めずに動かし続けました。

私の泣き声に押されたのでしよう。

由美子も同じ様に声を出して泣き始めました。

この夜、私たちは二人並んで声を出して泣きながら食事をとったのです。

あなたが戻ってきたら元気な顔で迎えてあげなければならない、

憔悴しきつた顔は見せられない、

今、私たちに出来ることはあなたのお母さんが用意してくれた食事をしっかりと食べること、

ただひたすらにそう信じながら。

私たちが出されたものを何とか食べ終わった頃には、不思議ともう涙は止まっていました。

食事を終わるとお母さんは、

「そのままでもいいから」

と言って、私たち二人を大きな炬燵のある和室へと案内してくれました。

炬燵はそのまま眠り込んでしまっても大丈夫なように、敷かれた二つの布団と繋がっていました。

「あれこれ考えていても仕方ないから、早く横になりなさい」

そう言って、あなたのお母さんは私たち二人を残して和室から出て行きました。

私たちはあなたのお母さんの毅然とした態度に少なからず救われる思いでした。

炬燵に入るとすぐに足元から暖かさが体全体に広がってきました。

すると食事を摂ってお腹が膨れたせいもあってか、急激な睡魔に襲われ、

私たちは殆んど喋ることなくそのまま眠りへと堕ちていきました。

*

それからどれくらいの時間が過ぎたのでしょうか。

私は部屋の外の落ち着きのない足音に眼を覚ましました。

その後、

「理恵さん、由美子さん、早く起きて頂戴」

と言うお母さんの声に、飛び起きました。

「船が、船が戻ってくるの。連絡が取れたらしいの」

私と由美子は飛び起き、すぐに家を出る準備を始めました。

殆んどそのままの姿で眠り込んでしまっていた私たちは、準備と言っても髪を整えるくらいで、時間は必要ありませんでした。

既に外で待っていたあなたのお父さんの車に飛び乗り、それから四人を乗せた車はまだ明ける前の闇の中を港へと向かって急ぎました。

私たちはヘッドライトのその先の闇を無言のまま食い入るように見つめていました。

港へ着くと既に沢山の人が集まっていました。

特に事務所のまわりには人だかりが出来ていて、詳しい状況はすぐには分かりませんでした。

私も由美子もそこには近づけませんでした。

あなたのお父さんはその人ばかりを掻き分け、中へと入っていきま
した。

私たちは逸る気持ちを抑え、お母さんとともに事務所の外でお父さ
んが戻ってくるのを待ちました。

しばらくすると、中から歓声があがりました。

お父さんが上気した顔で私たちの元に戻ってきました。

「船はすぐそこまで戻ってきているらしい。もうすぐ港からも見え
る」

お父さんの話が終わらないうちに、事務所のまわりにいた人ばかり
が港の棧橋の方へと移動し始めました。

私たち四人も同じ様に港に入ってくる船が見える場所まで移動して
いきました。

皆、一様に防波堤の外に広がる暗い海を見つめていました。

人々のざわめきが徐々に小さくなってきた頃、やがてその闇の中か
ら一隻の船が現れました。

「も、戻ってきたぞ！」

港は一斉に歓喜の声で沸きあがりました。

ガッツポーズをする人、抱き合っただけで喜び合う家族、両手で顔を覆って泣きながら蹲る女性。

真冬の凍るような寒さの中で、港はお祭りのような騒ぎになりました。

でも、まだ安心は出来ません。

実際、過去には防波堤の内側まで戻ってきていながら、暴風と横波を受けて転覆し、

港で出迎えている人たちの目の前で全員亡くなってしまったという痛ましい事故もあったのですから。

船は私たちの心とは裏腹に、ゆっくりとゆっくりと港へと入ってきました。

少しずつ大きくなっていく船影、食い入るように見つめる沢山の瞳。

船上の灯りは消えてしまっていました。やがて乗組員の姿がはっきり分かるくらいの距離まで戻ってきました。

乗組員一人一人の顔がはつきりと分かる所まで近づいて、しかし船は何故かそこで停止してしまいました。

「いた、あそこ！」

由美子の声と殆んど同時に私も船上にあなたの姿を見つけました。

「うん、うん」

私も声にならない声で返事をしました。

あなたからは私の姿は見つけられなかったかも知れませんが、私はあなたが帰ってきてくれた、ただそれだけで十分でした。

乗組員は船上に整列するようにして立ち、こちらを見つめていました。

死地をくぐり抜け、精魂尽き果ててしまったのでしょうか、

港の人たちの表情とは反対に、あなたを含めて乗組員に笑顔はありませんでした。

手を振るでもなく、接岸の準備を始めるでもなく、ただ無言のままこちらを見つめていました。

船は止まったままだつまでも接岸する気配がありませんでした。

乗組員たちは相変わらず船上に整列するように立ったまま静かにこちらを見つめています。

棧橋で出迎える人々の喜びがやがてどよめきへと変わり始めたとき。

突然あちこちで悲鳴とも思われる声が次々と上がりました。

私たち沢山の人たちが見つめる中、一人、二人と乗組員の姿が幻のように消え始めました。

「待って！」

「いやあっ！」

そんな叫び声が次々と響き渡る中、一人、そしてまた一人……

私も必死で叫ぼうとしましたが、声がかたたく出ませんでした。

そして、あなたの姿も……

やがて船とともにゆっくりと消えていきました。

眼を閉じ、私も連れて行ってと心の中で叫んだ瞬間……

ハツとして眼を開けると、天井に浮かぶ小さな電球が目に入ってきました。

炬燵の横で、昨夜と同じ服のまま横たわっている私。

夢？

あまりにもリアルに感じたけれど、どう考えても今のは夢……。

横を向くと同じ様に由美子が昨夜と同じ服のまま眠っていました。

私は涙を拭いながら、

「ゆみこ？」

と呼びかけてみましたが返事はありませんでした。

よく見ると、由美子の眼からもたった今流したばかりの涙が溢れ落ちていました。

もしかして今、由美子も私と同じ夢を見ていた？

窓の方を見ると外はまだ暗く、恐ろしいほどの静けさが私を取り巻いていました。

雨風はすっかりおさまったようです。

真つ暗な窓を眺めながら私はぼんやりと、あなたはもう帰って来ない、そんなふうに感じ始めていました。

夜が明けると私たちは再び、漁協へ行きました。

私は夜明け前に見た夢のことは由美子には話しませんでした。

彼女も眠ったまま流していた涙の意味については何も話してきませんでした。

荒れが治まってきたので仲間の船が次々と搜索のために出港していききました。

しかし、この日も手がかりとなる何の情報も得ることが出来ませんでした。

結城君が一日遅れて東京から帰ってきたので、私は由美子を彼に任

せ、夕方になって実家へ帰りました。

成人式にも帰らなかった私が突然帰省してきたにもかかわらず、両親にはそれほど驚いた様子はありませんでした。

事情はそれなりに察していたようです。

あなたの船が消息を絶つてから5日目、私はもう東京行き列車に乗っていました。

「あの子にとってはこれで良かったのかもしれない」

「そのうちあきらめもつくでしょ……」

帰ってきた日の夜、リビングのドアの外で聞いてしまった両親の本音。

分かってはいたけれど、今、このタイミングで耳にしたくはなかった。

ああ、私の居場所はここにも無いんだ……

そう思った瞬間、東京へ戻る決心をしていました。

私の両親の他には、由美子と結城君が見送りに来てくれました。

一昨年の春、私が一人東京へ向かうときは、沢山の人たちの中に笑顔で見送ってくれるあなたの姿があったはずでした。

今は、由美子も結城君も私と眼が合うと俯いてしまいます。

たぶんこれも夢なのだ、あの日、由美子から電話がかかってきたあたりから。

朝が来て目覚めたらすぐに嘘だと分かるはず。

一生懸命そんなことを思いながら、やがて列車は何事もなかったかのようにゆっくりと動き始めました。

初めて東京に向かうときはあんなに泣いたのに、この日は涙の一粒も流れませんでした。

窓の外に沈む灰色の海。

私からあなたを奪っていった故郷の海が憎い、もう二度と故郷へ帰ることはない、

そう思いながら乗り込んだ列車でした。

*

東京へ戻るとまたいつもの生活が始まりました。

長い夢、いつになったら覚めるのだろう、そんなことを思いながらの毎日。

殆んど同じ生活を送っているつもりなのに何かが違っていました。

いいえ、

殆んど同じ生活を送っているのにもかかわらず何もかもが変わって

しまいました。

街へ出ると、梅が咲き、木蓮が咲き、やがて桜が咲き始め、

すれ違う人々の姿も冬から春の装いへと変わっていききましたが、

それは毎年繰り返される何も変わらない風景。

ただ一つ大きく違っていたのは…、

あなたのいない世界へ

私一人が取り残されてしまったということです。

あなたの船の搜索が打ち切られたことはテレビのニュースで知りま
した。

それから街を歩いていても、

大学の講義を受けている最中でも、

普段の何でもない時にいきなり流れ出す涙。

友達と普通に喋っているつもりなのに、

「どっしたの?」と言われて、

初めて自分が泣いていることに気付かされることもたびたびありま

した。

そんなことが続くようになってから、私は次第に人前に出ることが億劫になり、

部屋にこもって大学へも顔を出さない日が増えていきました。

時折りかかってくる由美子からの電話は、私を気遣ってくれるものであると分かっていたましたが、それさえも鬱陶しくなっていく自分がいました。

故郷からの便りはあの日を境に途絶えたまま、私の机には受け取る人のいない手紙だけが空白の時を刻むように増えていきました。

あの日、頭の中が真っ白になり、そのあと一気に広がった悲しみ。

悲しみが徐々に苦痛へと変わり、苦痛はやがて絶望へ。

初めて知りました。

人って、落ちていくときが一番苦しいのですね。

悲しみや絶望のどん底にいるときよりも、底の見えない暗闇の中を落ちていくときの恐怖。

ゆっくりとゆっくりと近づいてくる真実。

独りの部屋でもがき続ける私。

そんな日々が続く中、ついにその日がやってきました。

あなたのお母さんから届いた一通の手紙には、

あなたのお葬式を出すことになった、

そう書かれていました。

出来れば私にもお線香をあげて欲しいと。

遺体が戻らなくても一定の期間が過ぎると亡くなったことに出来る
ということは知っていました。

海の事故では、遺体があがることは殆んどなく、そのため頑なお
葬式を出そうとしない遺族がいることも知っていました。

わたしは……。

私は認めない！

絶対に認めない！

どんなことがあっても、あなたの遺体を見るまでは絶対に認めない！

何故、今頃になってあの人を死んだことにしようって言うの？

ちょっとくらい家を空けたからって、連絡してこないからって、殺
してしまつというの？

この半年の間に私はいつしか、

あなたは帰ってくる、

遺体があがらない限りあなたは生きている、

私を迎えに来ると約束したのだからきつと帰ってくる、

そう思うようになっていました。

いいえ、そう思うことで無意識に自分を支えようとしていたのです。

その一方で、あなたが船とともに消えていく夢を見たときから、あなたはもう帰ってはこない、はつきりと心の中で、それは確信にも近いくらいに感じていた自分がいたことも事実です。

それを誤魔化しながら、あなたが約束を守るためにきつと帰ってくる、いつか必ず帰ってくる、そう自分に言い聞かせながら毎日を続けることにやがて疲れ果ててしまった私……。

小学生の頃、確かあれは3年生のとき。

ある日、担任の先生が朝のホームルームでクラスの皆に言いました。

「今日はひとつ、嬉しいお話があります。

さんのお父さんが3年ぶりにおうちに帰ってこられました。

さんは3年ぶりにお父さんと再会を果たしました」と。

さんの名前は思い出せないので、話の内容だけは今もはっ

きり憶えています。

その日、　　さんは欠席していました。

私は、ふーんという程度に聞いていましたが、何故か先生は少し涙ぐんでいました。

　　さんのお父さんが三年ぶりに帰ってきたら、なんで先生が泣くんだろっ……

なんて思っていましたか、

話をきいているうちにその理由が分かりました。

　　さんのお父さんは、3年前に船の遭難でお父さんを亡くしていました。

既にお葬式はあげていましたが、三年経って底引き網に引っかかり、遺体に戻ってきたというのです。

殆んど奇跡に近い話です。

先生はあの時、「嬉しい話」と言いました。

遺体となって戻ってきたのに嬉しい話なんて、何か変ですね。

あなたは今、どこにいますか？

冷たい冷たい海の底ですか？

他の乗組員の人たちと離ればなれになっていませんか？

少し眠たそうに目をこする、

何をする気にさえもなれない毎日。

部屋の壁にはドヌーヴの古びた映画のポスター。

突き刺すような視線が私に絡みつきます。

窓の外はもう6月。

雨の中で音も無く紫陽花が揺れている…

ぼんやり眺めては何もしない毎日が過ぎていきます。

机の奥深く眠ってる手紙、

読む人のいない私の想い。

海に流したらあなたに届くでしょうか？

頬杖つきながら退屈な毎日。

また溜息まじりの、

私は…

独り

あなたのお葬式が執り行われた日、

私は東京で独り部屋の中、大量の睡眠薬を飲んでいました。

左手の薬指には金の指輪、

右手の薬指にはお祭りであなたから初めて買ってもらったおもちゃの指輪を、

そして、

あなたに届けられなかった半年分の手紙を胸に抱いて。

次第に薄れて行く意識の中で、

あなたが迎えにきてくれる、

必ず私を迎えにきてくれる、

ただひたすらにそれだけを祈りながら…。

*

あなたの両親が半年後に葬式を挙げた理由を私は後になってから知ることになります。

私が眼を覚ましたとき、ぼんやりと浮かぶ視界の隅に、私の両親と、由美子、そして結城君の顔が見えました。

大学の友達もいました。

皆生きている人たちばかりです。

私は自分が死ねなかったことをすぐに理解しました。

明らかに様子がおかしかった私を、大学の友達が訪ねてきて発見したそうです。

処置が早く、結果的に命に別状はありませんでした。

「理恵、私よ。分かる？」

「よかった……」

まだ全身を覆っている激しい苦痛の中で由美子と結城君の声が遠くに聞こえてきました。

みんなの少しだけほっとした表情を感じた私は、次第にどうしようもない怒りと悔しさがこみあげてきました。

「どうして…死なせてくれなかったの？」

私はそう呟いていました。

「り、理恵、おまえ…、何てこと…」

ベッドの脇で泣き崩れるお母さん。

俯いてしまった友達。

それでも私は病室の天井を見つめたまま

「死なせて、お願いだから…」

と呟き続けていました。

「理恵は…、まだ混乱しているようだ」

申し訳なさそうに助けしてくれた友達に話しかけるお父さん。

両手で顔を覆いながら病室から飛び出していく由美子。

あと少しであなたが迎えに来てくれる場所まで辿り着けたのに…。

ここは私がいるはずの場所じゃないのに…。

生きていることをこれほどまでに恨んだ日はありませんでした。

*

その後、私は徐々に体力が回復してくると、今度は回診の医師に死なせてくれと泣きながら懇願したり、看護婦さんに何故助けたと怒りをぶつけたりするようになりました。

物を投げつけて当り散らすことも増えていきました。

時々面会に来てくれた結城君には、あなたが代わりに死ねばよかったとか、わざわざ京都からお見舞いに来てくれた由美子に対して、あの日、由美子が電話さえしてこなければこんなことにはならなかったと、親友に対してさえあまりにも酷い言葉を浴びせかけるなど、徐々に私は付き添っているお母さんにも手が付けられない状態にな

っていきました。

自殺を繰り返す惧れがあるとして、私は精神病棟に隔離され、更に担当の医師の許可が出ない限りは外部の人間とも一切接触することが出来なくなりました。

大学の方は休学となり、私はここで一年以上を過ごすことになりました。

ここでは毎日が同じことの繰り返しでした。

泣き喚いたり、暴れたり、時には長時間、人形のように身動き一つせずに黙り込んだり。

その度に、医師や看護師は、私に合わせて様々な行動をとりました。

私は、そんな彼らの姿を恐ろしいほど冷静に観察していました。

私がどんな態度を取ったら、彼らはどんな対応をしてくるのか。

明らかに異常な行動をとる自分の横にもう一人別の冷静な自分がいて、それを観察している。

自分が今何をしているのかということは理解しているのです。

理解してやっているので余計に性質が悪く、普通なら恥ずかしくて人前では出来ないような行動を理解した上でやっている、そのこと自体が既に普通ではないのに、そのところに対してだけは何故か理解が及ばないのです。

今振り返ってみてもとても不思議なところですよ。

私がそうすることに何か目的があったわけではありませんでした。

あなたが私のいる世界からいなくなってしまうた、その事実を受け入れようとする自分と絶対に認めようとしないう一人の自分がいた、ただそれだけははっきりしていました。

二人の自分が一つの体の中でぶつかり合う状態、いったいいつまでぶつかり続けるのか、

こんな状態がいつまで続くのか、
私はいつたいどこへ行けばいいのか、

それはこのときの私にはまったく分かりませんでした。

*

あなたが私の前からいなくなつて2年目の冬、私は復学しました。

由美子や結城君には酷いことをしましたが、二人はお互いしっかりと支えあつていて、

私のことも何も言わず暖かく迎えてくれました。

今まで私は自分を愛してくれている人たちのことは何も考えられない人間でした。

あなたがいて私がいて、ただそれだけでした。

それだけがすべてだと思っていました。

私を愛してくれている人たちが他にも沢山いる、そんなこと少しも感じようとしてきませんでした。

なんて自分勝手に傲慢な人間だったのでしょうか。

2年遅れてしまいました。私は改めて医師を目指し、猛勉強を始めました。

医師になって故郷に帰り、開業する、このとき自分の進むべき方向を明確に定めるにはそれしかありませんでした。

少なくともあなたとのことと私の将来の目標は別のものだったのですから。

大学を卒業するまでの数年間、私はそれこそ死に物狂いで勉強しました。

まるで何かに取り付かれたかのように。

青春を謳歌する、そんな言葉は私には不要でした。

青春を謳歌することがすなわち勉強しないで遊ぶこととは思っていませんでしたから。

早く一人前の医師になる、それが私にとっての青春の謳歌でした。

長い入院生活の中で、医師の仕事の素晴らしさをこれでもかと思せつけられ、

一日でも早く自分も一人前の医師になって誰かの役に立ちたい、その思いだけがその頃の私の生活の支えとなっていていきました。

卒業を控えたある日、あなたのお母さんから一通の手紙が届きました。

大丈夫、もう私は大丈夫だから…

少しばかり震える指先で封筒を開けると、あなたのお母さんの手紙と一緒にもう一つ別の封筒が入っていました。

お母さんの手紙には、こんなことが書かれていました。

『この手紙を書くことにずいぶん悩みました。

息子はもう帰っては来ない、分かっているでも諦めきれない自分がいる。

それでもお葬式は出さないわけにはいかないと思っていました。

息子が帰ってこなくなってから半年後、お葬式を出すことに決めました。

そしてお葬式を出せばいつかあなたも息子のことは諦めてくれるでしょう、

そう思ってあなたにはその日を知らせました。

でも、あなたは姿を見せてはくれませんでしたね。

後になって聞きました。

あなたが息子の後を追おうとしたこと。

実は、私は息子が生前にあなたに宛てた手紙を隠していました。

息子が帰ってこなくなって、もう諦めた頃。

息子の部屋を整理していたときに見つけました。

明らかにあなたに宛てた手紙ですが、息子はもともとそれをあなたに渡すつもりはないようにも思えました。

私がそれをあなたに手渡さなかったのは、あなたには早く息子のことを忘れて欲しかったからです。

でも、あなたが息子の後を追おうとしたことを知って、少しずつ考えが変わってきました。

息子の本当の気持ちを知ってもらった上で、あなた自身がきっちり心のケジメをつけるべきだと思うようになりました。

たぶん、もう見せてもあなたは大丈夫だと思えます。

息子のこと、心から愛してくれてありがとうございます。

息子の後を追うなんてことは二度としないでください。

息子はそんなこと望んでいません。

あなたが別の幸せをもって帰って来てくれたら、そのときこそ息子は本当に天国へと旅立っていける、

今はただそれだけを願っています』

私は恐る恐るあなたが私に宛てたという手紙の入った封筒を開けました。

そして、一度眼を閉じて大きく深呼吸をしてから再びゆっくりと眼を開き、あなたの手紙を読み始めました。

『理恵、

理恵がもしこの手紙を一人で読んでいることがあるとすれば、

そのときには俺はもうこの世にはいないということだな。

でも、勘違いしないでくれ。

これは俺が死ぬことを予想して書いたものじゃない。

まあ、謂わば海に出る男の覚悟みたいなものかな。

理恵もよく知っている通り、いったん海に出れば絶対ということはありません。

いつ何の前触れもなく帰ってこなくなることもある。

半年だ。

半年たつて帰つてこなかったら、そのときは俺のことは潔く忘れてくれ。

約束も守れないような男をいつまで待つていても仕方がない。

でも、冷静に考えてみれば、今時、船の遭難で死ぬ人間なんて、交通事故で死ぬ人間よりはるかに少ないんだ。

そういう意味では理恵、おまえの方が心配だ。

東京は車が多い。

田舎育ちのおまえは、信号機のないところで突然渡ろうとするかも知れない。

それはあまりにも危険すぎる。
絶対するなよ。

こういうのを残しておく、案外何も起こらないものだ。

二人、いつか齡をとつて、この手紙が笑い話になることを祈るよ』

相変わらず、あなたらしいあっさりとした文面。

久しぶりに見る懐かしい大きな文字。

まるで目の前にあなたがいるような、そんな錯覚に陥ってしまいま

した。

あの夏祭りの頃の私だったら、あなたがこんなこと言ったらきつと思いつきりひっぱたいていたことでしょう。

「二度と言わないで！」

きつと、そう叫びながら。

私はあなたの文字を見つめながら、溢れ出す涙を何度も何度も拭っていました。

こんなに涙が溢れてきたのは本当に久しぶりです。

私はあなたとあなたのお母さんの手紙を胸に抱きしめ、いつしか大きな声を出して泣いていました。

バカ！

たった、半年で

忘れられるはずないじゃない！

それでもあなたがいなくなった頃の、あの深い絶望の海へと沈んでいくような、締め付けられるような苦しみはもうありませんでした。

うまく表現できませんが、今はまだ、あなたを亡くしたことが哀しい、哀しいけれど、あなたを愛してよかった、あなたと同じ時を過ごすことが出来て本当に幸せだった、素直にそう思える自分がそこにいたのです。

あなたのあとを追って行きたい。

あなたが眠る冬の海に、この身を投げて傍に行きたい。

あなたも一人ぼっちじゃ、寂しいでしょ？

いつも冬が来るたびにそう思いました。

何度も何度もそんなことを思いました。

時間って、ありがたいですね。

壊れた心を一つずつ拾い集めて、ゆっくりと温め直してくれる、

まるで魔法のようです。

卒業式を迎えるまでに、私、セーターを編み終えました。

あなたが好きだった色です。

昔一度編みかけていた糸を、あなたがいなくなってからすべて解いてしまっていました。

でも、その糸を捨てることが出来ずにずっと持っていました。

少しずつ編みあがっていくセーターは、それはまるで壊れてしまった自分の心を、

一つ、また一つと紡ぎ直していく作業のようにも思えました。

もう渡すことは出来ないけれど、あなたのことをこうして静かな気持ちで思い出せるようになっていたことだけは確かです。

あなたから貰った金の指輪は、今もずっと変わることなく私の薬指に輝いています。

私が故郷に戻ったら迎えに来てくれる、あの夏祭りの夜の笑顔を約束の変わりに残したままで、あなたの船は二度とは戻ってきませんでした。

私がこうしてあなたの指輪をいつまでも外さないのは、約束を破ったあなたのことを心の底ではまだ許しきれていないからです。

医師になり、故郷で開業することが私の目標でした。

でも、医師になって故郷に帰っても、私を迎えてくれるはずのあなたはいいのです。

そのとき、私は本当の意味であなたがもう私のいる世界からいなくなってしまうのだという現実を、

今度こそ本当に認めざるを得ない、それが怖かったです。

私が指輪を外してもいいと思える時は本当にくるの？

私が故郷へ帰ることが出来る日はやってくるの？

あなたの手紙を読み終えたとき、そのときの私には、あなたがいない故郷へ帰る勇気がまだありませんでした。

あなたがいなくなってから、すでに6年が過ぎていました。

第三章

故郷へ

卒業後、私は大学病院に助手として残りました。

一人の医師として働き始めた頃、私が初めて担当した高校生の患者さんから言われました。

担当と言ってもまだ新米医師でしたから、彼女の話し相手と言った方が正しかったかも知れません。

「先生は美人で、頭が良くて、こんなに大きな病院で働いていて、ちゃんと彼氏もいるんでしょう？ 羨ましい……」

医師になるにはそれなりの努力も苦労もあつた。

今の自分に辿り着くだけでも大変な時間を必要とした。

でも、彼女から見れば私は羨ましいほどに欲しいものが何でも手に入る、きつとそんなふうに見えたのでしょう。

彼女は生まれたときから心臓に欠陥があつて、ずっと人並みの生活が出来ないまま大きくなつてきました。

そして私が担当になつた頃には既に彼女の体は限界にきていました。

それでも彼女は自分を愛してくれる家族や友達に笑顔を振りまき、将来の夢を語り、一日一日を精一杯生きていました。

そうすることがまるで自分の罪を償うかのように。

彼女には何の罪もありません。

でも彼女は自分が沢山の人を悲しませている、そう感じているようでした。

彼女自身、もうそう長くないことは悟っていました。

だから、それがどんなに辛いことだったのか、私には手にとるように分かりました。

私は両手に余るほどの愛情に囲まれていながら、自分のすべてを終わらせようと思いました。

愛する人を追いかけていくことを誰にも邪魔されなくなかった。

私の命、

私だけの命、

自分で自分の命を終わらせることが、人間だけに与えられた最も人間らしい死に方であるとさえ思っていたときもあった。

自分にとってどうすることが正しかったのか、本当は今でもよく分かっています。

彼女は自分の命が自分だけのものではないことをよく知っていました。

そこが私と大きく違っていった部分です。

「先生、私にはあと何度朝がくるの？ 朝の数が決まっているのなら、私眠らない。」

そうすればもう少し長く生きられるでしょ？ 眠ることが怖い……」

彼女は私の前だけは時々、弱音を吐きました。

みんなの前で明るく振舞っている分、どこかで弱音を吐かないと、彼女自身が自分の心を支えきれなかったのかもしれない。

結局彼女を助けることは出来ませんでした。

彼女は最期の最期まで周りの人のことを気遣いながら逝きました。

「私が生きることによって罰が当たるなら、私どんな苦しみにも耐える。

そのかわり……もし元気になったら、

私いっぱい勉強して、理恵先生みたいになって、沢山の人、助けたい……」

私の手を握る彼女の手から次第に力が抜けていき、そして二度と握り返してくることはありませんでした。

生きようとしても生きられない不条理、

いくらでも生きていけるのに終わらせようとした自分。

患者の前で医師が泣いてはいけないことを知っていながら、私は泣いていました。

悲しいからではなく、悔しさと自分への怒りの涙でした。

初めて受け持った患者だったこともあって、私は長い間、彼女の死を受け入れることが出来ませんでした。

医師としてやっていく以上、助けられなかった命と沢山向き合うことになるのは当たり前のことです。

それなのにいつまでも人の死を客観的に受け止められなかった私はやがて臨床から離れ、病理の方へと移っていきました。

故郷に帰って開業することを目指していた私にとっては大きな挫折でもありました。

それからしばらくして、私は私の人生を大きく変える人と出逢うこととなります。

同じ大学を卒業していた医師です。

時々大学の方へ顔を出す程度で、普段は海外を飛び回っているような人でした。

彼は私に言い切りました。

「死にたいやつは死ねばいい。

どうせ生きていても役に立たないから、せめて死ぬときくらいは臓器提供の意志でも示してくれ。

少しくらいは人の役にたてるだろう」と。

医師なのになんて酷いことを言う人でしょう。

当然のように私たちはぶつかり合いました。

最初から死にたくて死ぬ人なんていません。

苦しくて苦しんで、追いつめられて、もうそこしか行く場所が無いからそうするのです。

心と体と両方はもう助けられない、だからせめて心だけは守りぬこうとして、肉体の方を放棄してしまうのです。

きっとそこまで苦しんだことの無い人には理解できっこない。

それでも彼は言い切りました。

「生きたいと思ってもどうしても勝てない病がある。

生きたいと思っても、助けたいと思っても見捨てられていく命が世界中には沢山ある。

日本にいたら、簡単に直せる病や怪我でさえ死んでいく子供たちが数え切れないほどいる。

苦しいから死にたいなんていうやつはそれだけ生ぬるい人生を過ごしてきたってことだ」

「肝臓だって腎臓だって、病に冒されると自力では元に戻せないから医学の力を借りて直すのです。

医者はその手助けをします。

心だって同じです。

心が病んで、自力ではもうどうにもならなくなったとき、誰かが助けてあげないと駄目なんです」

「生まれた場所が少し違うだけで、常に死というものを背負いながら、

その日その日を生きななければならない人たちから見れば、

心の病になれるだけ幸せな場所に生まれたってことだ」

あまりに極論的な言い方でしたが、私はそれ以上何も言えませんでした。

私自身が沢山の愛情に囲まれて生きていながら、唯一つの哀しみのために自らを終わらせようとしたのですから。

彼が私に対してここまで極論的な言い方をしたのには理由がありました。

死を客観的に見られるようにすること、そのための荒唐治療だったのです。

彼は私の反論したことが決して間違っていないこともよく理解してくれていました。

ある意味、彼にとって私は患者の一人だったのかも知れません。

彼は既に結婚していましたが、旅先で奥さんを亡くしていました。

悲惨な医療現場で、日本にいればすぐに治せるような病気だったにも拘わらず、必要な薬が間に合わなかったそうです。

彼の奥さんも医師でした。

彼をよく知る人からその話を聞いて、私にはなんとなく分かりました。

薬が間に合わなかったのではなく、きつと目の前にいる患者のために自らはぎりぎりまで使わなかったのだと。

その後も私は彼と時々ぶつかり合いました。

そしてぶつかり合いながら、私は再び臨床現場へと戻っていきました。

いいえ、引き戻されたと言う方が正しかったかも知れません。

もし彼と出逢わなかったら、私はいつまでも患者を診ることが出来ない半人前の医師でしかなかったでしょう。

*

本当にあの日からもう、十二年も過ぎたのですね…

あなたとのことを辿ってきたら少し長くなってしまいました。

隣で少し退屈そうにしている人がいるので、そろそろ止めておきましょう。

長い坂道を上り詰めたら、あなたの名前を刻んだ墓標があります。

ここから見下ろすことが出来る小さな海の町、

そう、ここはあなたと私の故郷。

あなたを呑み込んだ冬の激しい海も、今日は春の柔らかな陽にきら

めいて眩しいくらいです。

この広い海のどこかにあなたが眠っているなんてずっと信じられなかった。

いいえ、あなたが冷たい冬の海の底にいたいと思いつけて自分自身の心を縛り続けてきたのは私の方だったのです。

でも今日の私は今までの私とは少し違います。

今、私の心の中に新しい何かが育っていることだけは確かです。

やっと故郷に辿り着くことが出来ました。

あなたはもう気がついたでしょうか？

私の左手の薬指にふたつの指輪。

ずっと外すことの出来なかった金の指輪、

その隣に並べるようにして輝いている指輪は、今、私の隣にいる人からの贈り物です。

同じ大学病院で働く同僚でもありません。

あなたの指輪に重ねるようにしてはめてくれました。

「それだけはだめ」

私は最初、拒否しました。

私自身がケジメをつけ、あなたの指輪を自分で外せるまではと。

でもこの人はそんなことまるで関係ないかのようにそのまま並べてはめてしまいました。

そしてどうしてもあなたに会わせて欲しいと言つので、今日この場所と一緒に来ました。

私は今日、あなたの思い出をすべて燃やしてしまうつもりで来ました。

私なりにケジメをつけるつもりだったので。

でも、この人は私がそうすることに必ずしも賛成しませんでした。

むしろ反対でした。

形あるものを燃やすことは出来ても心まで燃やしてしまうことは出来ない。

私、どうしたらいいのかわからなくなりました。

そんな私を見かねたのか、この人があなたに向かってささやいた言葉。

「いろいろなことがあったねと、穏やかに微笑みながら読み返せる日がいつか必ずやってくるよ」

私、この人の言葉を信じてみようと 생각합니다。

あなたのいない故郷に帰る勇気がいつまでも持てなかった私。

人の優しさにばかり甘え続けてきた私、

そして今もそんな姿を見せている私をあなたはきつと叱っていることでしょうかね。

でも、もう大丈夫です。

この坂を下りたら、あなたの指輪はもう外します。

そして二度とはめることはありません。

だから、せめて今だけは許してください。

すべてを知った上で私を選んでくれたこの人について行きます。

私の心の中にいるあなたさえ受け入れようとしてくれるこの人のためだけに、

今日からは生きていこうと思っています。

その意味では二人で報告に来る必要があったのです。

結局、最後まで一人では帰って来られなかった私。

でもあなたのお母さんから言われました。

私が別の幸せを持って帰ってきたとき、

その時こそ本当の意味であなたが安心して天国へ旅立っていけるのだと…。

今、あなたはどのあたりにいますか？

そこからは今の私はどんなふうに見えますか？

故郷で開業する夢は叶いませんでした。これからは私なりに新しい夢を追い続けて生きていこうと思っています。

しばらく日本を離れることになります。

そして、これが私からあなたへ届ける最後の言葉になります。

ありがとう

そして……、

さよなら

終章

贈り物

伯母さんのすべてを読み終えたとき、私は声を殺して泣いていた。

ベッドの布団の中でうつ伏せになって。

“ありがとう、そして、さよなら”

私の頭の中に、何度も何度もこだまのように響き渡る。

その一言が言えるようになるまで、おばさんはどれだけ苦しんでいたことだろう。

あんなに優しくかった伯母さんの心の奥に、こんなにもこんなにも辛い思い出が隠されていたなんて…。

死のうとまでしたことがあったなんて…。

そして、それを知った上で伯母さんと結婚した伯父さん。

私は、伯父さんと伯母さんは普通に出逢って、普通に恋をして、普通に結婚したんだと思っていた。

楽しい楽しい思い出がいっぱいあると勝手に思い込んでいた。

伯母さんが亡くなるまでの二人を見ていると、とても辛い思い出があったようには見えなかった。

伯父さんもきつと辛かったはずだ。

今は何でもないように見せているけれど。

“ 時が思い出に変えてくれる ”

伯父さんはそう言っていた。

私は辛い思い出ならいらぬ、作りたくもないと思っていた。

だから、失恋することが分かっている、自分の気持ちを伝えても仕方ないと思っていた。

“ 後悔はいつまでたっても後悔として残る ”

これって、思い出にならないってこと？

辛かったことも楽しかったことも時が思い出に変えてくれる…

でも、

思い出に出来ないことほど辛いものはない…

伯父さんは今それを私に伝えたかったんじゃないのかな？

伯母さん、ごめんね。

何にも知らずに、勝手に腹を立てたりして。

私は、伯母さんの手紙を抱いたまま、やがてゆっくりとゆっくりと眠りへと落ちていった。

*

一週間後

私は、再び伯父さんの部屋で、伯母さんの遺品の整理を手伝っていた。

そしてそこで伯父さんに話した。

勇気を持って好きな人に気持ちを伝えること。

「私、たぶん泣くから…」

「それでもいいんだよ。泣けるってことは幸せなことなんだよ」

ま、また伯父さん、難しいことを…

失恋して泣くことが幸せなこと？

意味わかんない。

苦虫をつぶしたような顔をしている私に、伯父さんはもう一言付け足した。

「真奈美がその答えを出す頃には、伯父さんはもういないだろうね」

伯父さんはそう言いながら、でも顔は優しい笑顔で満たされていた。

「伯父さん」

「なんだい？」

「おばさんは……」

「…？」

「その…、」

「どうしたんだい？ 言っつてごらん」

「ノートのこと、すべて思い出に変えることが出来たの？」

「どうだろうね、こんなに早く理恵は突然逝ってしまったから。いつか笑いながら読み返せるその日がやってくる、そう信じて大切に持っていたんだ…」

伯母さんの最期はあまりにも突然だった。

風邪を拗らせて、高熱が出て、入院して三日目には呆気なく逝ってしまった。

急性腎不全がどうのこうのって聞いた。

「あっ……」

私は急いで手紙の束を解き始めた。

そうだ、そうだった。

伯母さんは伯父さんのその言葉を信じて、このノートを大切に持っていたんだ。

でも、伯父さんはそれを確かめる術はもうないと思っている…。

伯母さんが大切に持っていた“あの人”への手紙の中に、ひとつだけ伯父さんに宛てた新しい手紙が入っていた。

おそらくずっと後になって足されたものだから、きっと、伯父さんはそれを知らない。

もしかしたら…

伯父さん宛てのまだ新しいこの一通だけ、私は読んでいない。

怪訝な表情で私を見つめる伯父さんに、私はその一通の手紙を取り

出して渡した。

「これ、伯父さんに宛てたものだよ」

「……」

「伯父さん宛てだし、なんかまだ新しい感じがしたから、私読んでないの」

伯父さんは無言のまま、封筒からその手紙を取り出すと、ついさっきまでの柔らかな表情とは打って変わって食い入るような眼差しで伯母さんの文字を追いかけた。

そして何度も何度も同じところを読み返しながらか、やがて「そうか、そうか…」と呟きながら微笑んだ。

でも、その微笑んだ頬にはいつしか幾筋もの涙が流れていた。

やっぱり、伯母さんの最期の気持ちは伯父さんに伝わっていなかった。

おそらく、いつ自分がいなくなっても大丈夫なように準備しておいたのだろう。

でも……

「天に昇るとき、一緒に燃やすべきだったかな……」

一週間前、伯父さんはそんなこと言っていた。

伯父さんは何にも知らないままで、手紙もノートと一緒に危うく燃やされるとこだった。

駄目だよ、伯母さん、ちゃんと伝えなきゃ。思ったときにはすぐに伝えなきゃ。

手紙にしてこっそり机の中に入れておくだけじゃ駄目だよ。ちゃんと言葉にして伝えなきゃ…

そこまで思っただけはハッとなった。

つい、先週までは失恋するのが怖くて自分の気持ちを伝えようなんてまったく考えていなかった私。

それなのに、伯母さんに対しては、思ったときにはちゃんと伝えなきゃ駄目だなんて言ってる。

勝手だなあ…

たとえ失恋しても、きっとすぐにさわやかな気持ちに変わるに違いない…

伯父さんの笑顔と涙を見ていて、私は何故かそんなふうに感じ始めていた。

「夏休みまでに、頑張っただけ気持ちを伝える」

「そうか、頑張りなさい」

「お母さんには内緒だよ」

「わかった。私の涙のことも内緒にしておいてくれ」

「うん、いいよ。私とおじさんとの秘密にしておくね」

明日はきっと晴れる。

そんなことを思いながら、私は伯父さんの部屋をあとにした。

(完)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0838ba/>

ふたつの指輪

2012年1月1日23時54分発行